緋弾のアリｒｙ　～春に恋するお年頃～

鈴ノ音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリｒｙ　～春に恋するお年頃～

【Ｎコード】
Ｎ０６５５Ｗ

【作者名】
鈴ノ音

【あらすじ】
武偵高に通う主人公　春都。

彼の日常は
朝食の準備→わずか五秒の食事時間→遅刻ギリギリの快感→日常・・・

ある日、親友のキンジを救おうとした事で彼の日常は変化を見せ始める

日常は変わりゆく（前書き）

この作品は鈴ノ音の妄想で展開いたします。
原作ブレイクを起こす可能性が１００％を超えるでしょう
それでも読んでいただけるのなら幸いです。

前回はまさかの投稿失敗・・・本当にすみません・・・

日常は変わりゆく

トントントン・・・

朝、包丁の小気味いい音が聞こえてくる

「♪～」

それに合わせて鼻歌も聞こえてくる
それはまさに新妻が愛する夫のために朝食作っている・・・ような
そんな光景

ただ一つ違うのはそこで調理しているのがエプロンをした可愛い女の子ではなく、身長１８０ぐらいの青年というところだけ。

この青年の名前は春都
武偵高に通う二年生である

春都「・・・よし、できた。じゃあいただきま～す！！！」

そして料理ができると春都は台所で朝食を猛スピードで食べていく

春都「ごちそーさま！やべ、遅刻する！！」

早い。時間にして約五秒ぐらいだろうか
何故彼がここまで急いでいるのか・・・それは彼が遅刻しそうだから

春都「ひってきまぁ～ひゅ！！」

そう叫び学校へと走り出す
その口にはお約束の食パン・・・ではなく歯ブラシが咥えられていた
だが一言言っておこう。

歯ブラシを咥えたまま走るのはとても危ないぞ！

・・・それはさておき
彼が学校へとダッシュしている時、一人の青年が自転車で激走して
いるのを目にした。春都はその青年に見覚えがあった

春都「・・・ふぃんじふぁ？はれ・・・（キンジか？あれ・・・）」

だが、なんかおかしい・・・
激走している彼を追いかけるものの存在に春都は気付く

キンジは、え～と名前なんだっけ・・・せ、セグウェイだっけ？に
後ろから追いかけられていた
人は誰も乗っていない。そのかわりにサブマシンガンのＵＺＩが取
りつけられていた

春都「・・・？」

正直、いったいなにが起こっているのか理解ができないがとりあえ
ず我が親友であるキンジを救うべく春都はキンジを追いかける

かなりの速さで移動するキンジ達になかなか追いつくことができな
い春都

春都「（ちっ！こうなったら撃ってセグウェイ壊すか・・・）」

春都はホルスターから銃を抜こうしたしかしその時!!

春都「（やっべ、家に忘れた・・・）」

大切な大切な銃を忘れたのに気付いた瞬間だった

春都「（ど、どうするか・・・考えろ春都。）」

軽く焦っている春都。

そんな事をしていると、またもや目を疑うような事が起きる

なんと女の子が空から降って来たのである

いや、正確に言えばパラシュートを使い降りて来たのだが・・・

そしてその子はセグウェイに向かい発砲。見事破壊に成功した

これで一件落着。

と思いきやいきなり女の子が逆さ吊りになりキンジの腕を掴む

春都「（おいおい、なんかサーカスの真似か?!）」

そんな事を思った瞬間、キンジが乗った自転車が急に爆発

春都「なっ!?」

いきなりの事に一旦理解ができなかったが、すぐに我に戻る

春都「（キンジ達は!?）」

二人は爆風に巻き込まれ体育館倉庫に吹き飛ばされる

俺は二人の安否を確かめるため全力で体育館倉庫に急いだ

日常は変わりゆく（後書き）

初めまして鈴ノ音と申します。
小説を書くのは初めてだったのですが・・・どうだったでしょうか？
他の方の作品を読み、自分もこのような面白いものを書いてみたい
と思いやってみました。
つまらないかもしれませんが読んでいただければ嬉しいです

歯ブラシは意外に大切なもの・・・

吹き飛ばされたキンジ達を追いかける春都。

そして駆けつけるとそこには・・・

拳銃を片手に持つキンジと、いつの間に増殖したのかＵＺＩ搭載セグウェイ達がそこにいた。

つーかセグウェイって分裂とかするの？

ま、いーや

春都「ほ～いふぃんじぃ～！！（お～いキンジ～）」

いまだに口には歯ブラシ・・・

俺は手を大きく振りながらにこやかに、そして爽やかにキンジの元へ走り寄ろうと・・・

ババババババッ！！！

へ？

チュインっ！！

歯ブラシの柄に銃弾が掠った音がした

おいおい、少し落ち着けって

ババババババババっ！！！

春都「うぉぉおおおおっ！！！！？？？」

ババババババババッ！！

危険と察知したのか春都は体育館倉庫に向けもうダッシュ！
そして滑り込むようにして体育館倉庫へと入った

春都「ごく。・・・飲んじまった・・・」

キンジ「・・・何故、俺の腕を引っ張る必要があったんだ春都・・・」

春都は体育館倉庫に入る際、キンジも一緒に連れ込んだのだった

春都「ん？だって危な・・・あぁ、今はあっちのキンジか」

春都は一人納得したようにそう呟く

「ちょっと！あんた何やってんのよっ！！」

そんな会話をしていると後ろからツインテールの可愛い女の子が現れた。
この子がさっきキンジを救った人物なのだろう・・・色々ちっちゃいのにすごいんだなぁ～（感動

ジャキ

そんな事を考えていたら額に銃口を押しつけられた

春都「・・・すみませんでした」

キンジ「すまないアリア。今片づける」

キンジは悩殺スマイルを決め再び外へ出ていった

今のキンジの状態なら余裕だろうし、俺がする事はないな。

アリア「・・・ねぇアンタ、いつまでそんな歯ブラシ咥えてんのよ」

春都「・・・へ？」

ツインテールの女の子が俺の額に銃口を押しつけたまま聞いてくる

アリア「だってそれ持つ所ないじゃない」

それを聞いた瞬間、俺の中に衝撃が走った・・・

柄がない・・・だと？

春都「・・・・・」

「ちょ、なんでそんなに落ち込んでるのよ！ただの歯ブラシなんだしまた買えば『だめに決まってんだろ』！？」

春都「・・・プレゼントされたもんなんだ」

～回想～

春都「なぁキンジ！今日は何の日か知ってるか？」

キンジ「うわ、なんで満面の笑みなんだよ。知るかそんなもん」

春都「ひでーな。今日は俺の誕生日だろ？（キラキラ）」

キンジ「へー、おめでと」

春都「プレゼントないのかよ！？」

キンジ「んなもんあるか」

春都「そ、そんな・・・」

「ハルく～ん♪」

春都「この声は・・・よう理子」

理子「お誕生日おめでと～♪はいこれプレゼント」

春都「え？あ、うん・・・ありがと」

キンジ「歯ブラシ？」

理子「虫歯になるなよ！」

春都「あ、はい・・・」（・ω・、）しょぼ～ん・・・

理子「・・・ぷっ！あはははは～、冗談だよぉ～！！ホントはこっちだよ」

春都「ケーキ・・・」

理子「えへへ・・・初めて作ったから美味しいかわかんないけどね」

春都「理子さんきゅ！歯ブラシも・・・まぁ大切に使うよ」

～回想終わり～

春都「・・・これ借りる」

そう言うと春都は外に向かい歩き始めた

アリア「は？・・・・っていつの間に私の銃！」

なんと春都はいつの間にか額に押し付けられていた銃を奪っていた

春都「すぐ返すからさ・・・ね？」

アリア「あっ・・・ちょっと！！」

～外

春都「おいキンジ。全部壊すなよ？」

キンジ「お怒りみたいだな春都」

春都「まぁな。んじゃ適当に殺ってくるっ！」

春都はセグウェイに向け突っ込んでいく

当たり前だが搭載されているＵＺＩは春都を狙いを定め・・・そして

ガガガガガッ！！

乱射。
だが既にその場所には春都おらずセグウェイの真横に立っていた

春都「俺のお気に入りを壊したお礼だ」

ダンっ！ダンっ！！ダンっ！！！

春都が放った３発の銃弾は確実にＵＺＩを破壊、キンジもどうやら無事に残りを片づけてくれたらしい

春都「さすがキンジ、一瞬で４機も壊しやがったよ」

キンジ「そう言う春都も相変わらずの腕前だ」

春都「たまたまだよ『ちょっとアンタ達』・・・おっと面倒くさそうな予感！これ返しといて、俺は行く」

そう言って春都はキンジに借りていた銃を渡す

春都「ははははっ！さらばだ！！」

春都は壊れていないセグウェイセグウェイに乗り颯爽とこの場を後にした

歯ブラシは意外に大切なもの・・・（後書き）

くだらなくてすみません・・・
どうでしたか？
こんな作品になると思いますが読んでくれると嬉しいです

転校生の名は！神崎・・・えっと、なんだっけ？

春都「おはぁ～・・・」

セグウェイに乗ってきたためいつもより数分早く到着した春都

春都「ふぅ～・・・」

まるでオッサンの如く椅子に座る

理子「ハル君おはよ♪」

友達と話していた理子は春都の姿を見つけると笑いながら駆け寄ってきた

春都「うぅ～・・・理子ぉ～（泣）」

理子「ど、どうしたのハル君?!」

春都「理子からもらった歯ブラシ・・・壊れちゃった」

理子「歯ブラシ?・・・もしかして誕生日の時ふざけて渡したあれ？」

春都「うん・・・（´；ω；`）」

理子「本当に大切してくれてたの?ぷ、あはは!!」

春都「だって理子がくれたもんだしぃ・・・」

理子「もうホントにハル君は可愛いなぁ～よしよし・・・」

理子は春都の頭を優しく撫でる

春都「ごめんよ～（泣）」

理子「ん～・・・じゃあ今日、理子とデートしたら許してあげる♪」

春都「デート？別にいいけど・・・」

そんな会話をしていると・・・

キンジ「は、春都てめぇ～・・・一人で逃げやがって」

疲れた顔したキンジが登校してきた

理子「あ、キー君！おっはよ～♪」

キンジ「ん？理子はなんだか元気そうだな」

理子「えへ～♪なんと今日はハル君とデートすることになったのです？」

キンジ「そうなのか」

春都「キンジも一緒に行くか？二人より三人のほうｇ『ハル君？』ど、どうした理子」

理子「理子はね～・・・デートって言ったんだよ?」

理子の声のトーンはやけに低い

春都「ん?だっていつもみたいにゲームとか買いに行くんだろ?」

理子「むぅ～!そうだけど、気持ちの問題なんだよハル君っ!!」

春都「?」

キンジ「まぁなんだ。俺は行かないから二人で・・・な?」

理子「うん・・・もぅハル君の馬鹿っ!」

理子はそう言うとそっぽを向いてしまった

なんかヤバい事した?俺

そんな事を考えているチャイムが鳴り先生が入ってきた

先生の話だと転入生が来るらしい。しかも女子

それを知った武藤は雄叫びをあげている

春都「転入生ねぇ～・・・」

確かにその響きは運命を感じずにはいられないが、果たして発狂するほどのものであるのか。

教室に一人の女の子が入ってくる

背は小さく髪はツインテール。その瞳は・・・ってあれ?なんかあの子見た事あるんですけど

春都「おいキンジ・・・あれ」

キンジ「言うな」

キンジは頭を抱え俯く

アリア「私アイツの隣がいい」

色々小さい子はキンジを指差し言う

春都「ご指名だぞ」

キンジ「言うなぁ～！！」

ヒステリックな声をあげるキンジ。
そして武藤は空気を読んでか自分の席を譲る
武藤よ。今のお前の好意（行為）はキンジにとって有難迷惑だぞ？

アリア「はい、これさっきのベルト」

転入生はキンジの目の前まで歩いて行くと、ベルトを投げ渡した

理子「理子わかった！わかっちゃった！！これフラグばっきばきに立ってるよぉ！！」

いきなりそんなこと言いながら席から立ち上がる理子

理子「キー君ベルトしてない。そのベルトをツインテールさんが持ってきた・・この謎はつまりっ！」

「キー君が彼女の前でベルトを取るような事をしたって事だよぉ～？」

理子が身体をくねくねとさせる

春都「そうなのか。キンジおめでと～今日は赤飯だな」

二人の発言により騒がしくなる教室。聞こえてくるのはキンジへの罵声

キンジ「お、おい！待ってくれよ！？つーか春都は知ってんだろっ！！」

春都「ん？俺はあの場所に少ししかいなかったから」

キンジ「なぁっ！？」

バンッ！バンッ！！バンッ！！！

だがこの騒ぎも何発かの銃声によって打ち消される事となる

アリア「れ、恋愛なんてくだらない！ぜ、全員覚えときなさい！そういう馬鹿な事言うやつは風穴開けるわよ！！」

バンッ！！

理子「ひ、ひえぇぇ～」

理子は腰を抜かしたように自分の席に座り込んでしまう。いつもなら俺のところに抱きついてきたりするんだけどな～・・・やっぱま

だ怒ってるのかな?

静まり返るクラスメイト・・・ヤバいな、ここは俺がなんとか場を和ませねば

春都「まぁ落ち着けよ」

春都は席を立ち彼女の前まで行き肩を掴む

アリア「な、なによ!」

春都「色々大変だとは思うけど（小さい的な意味で）元気な赤ちゃんを産んでくれ（ニコ・・・）」

静寂に包まれるクラス

春都「俺は女の子がいいな〜。えっと・・・神崎Hなアリアさん?」

アリア「・・・ね。」

春都「え?」

アリア「死ねぇぇ〜!!!!」

そう聞こえた時には綺麗な一本背負いが決まり俺は地面に叩きつけられていた

あ、やべ。意識が・・・

「はるｋ・・・ｎ！！はるｋ・・・！！！ハルく～んっ！！」

意識を失う寸前、理子の心配そうな顔が見えた気がした

ヤンデレ？いいえ、デレヤンです（前書き）

前回あらすじ

春都「Hなアリアちゃん（キラっ」

アリア「死ねぇぇえええええっ！！！」

春都「神は言っているここで死ぬうんめ・・・がく」

理子「ハルくぅ～ん！！！」

ヤンデレ？いいえ、デレヤンです

春都「はっ！知らない天井・・・」

目が覚めるとそこは一面荒野が広がり・・・

なんて事はなく、明らかに保健室だろう。まったくHちゃんは少し乱暴だな・・・

身体を起こそうとするがお腹のあたりがなんか重い
その原因を探るため手を動かすと・・・

何かサラリとした感触。おそらく誰かの髪だというのはすぐにわかった
ならこれは誰なのか？
答えなどすぐにわかる。こんなことする奴はたった一人だけだからなぁ～・・・

春都「お～い理子、起きろ」

・・・返事がない

耳を立てると微かに寝息が聞こえてきた

寝てんのかい・・・まぁ起きるまで理子の柔らかくて気持ちのいい髪を撫でているか

春都「♪～」

理子「すぅ・・・すぅ・・・」

春都「♪～～ｚｚｚ」

気付けば再び夢の世界へ旅立って行った春都だった・・・

春都「はっ！知らない天井・・・」

さすがに二回目はネタのキレが下がるが、言わずにはいられない魔法の言葉・・・

ケータイを見ればすでに学校が終わる時間

春都「いい加減起きなきゃな・・・理子は～・・・あれ？いない」

お腹のあたりにあった重みも気付けばなくなっている

帰ったのなら仕方ない、もう少しここで寝て・・・

理子「すぅ・・・すぅ・・・」

あれ？なんで理子が横で寝てんの？

ｏｋまずは落ち着こう。

ムニムニ・・・理子の頬っぺたをひっぱり集中する

うむ。よくのびるし柔らかい、それに肌もつるつるぷにぷに・・・

春都「間違いない！理子だ！！」↑混乱

理子「むぅぅうう～！！」

春都「ははははっ！理子、お前の（頬っぺた）は最高だ！俺の（指）に吸いついてくるようだぜっ！！」

理子「やぁ～っ！！」

春都「はは！いいぞ理子ぉ～！！」

理子「ふぁっ・・・あああぁぁっ！！」

二人「「はぁはぁ・・・」」

春都「・・・くだらね」

春都は一言そう呟き保健室を後にしようとする

理子「ちょ、ちょっとハル君！無反応っ！？」

春都がベットから起きるとすぐに起きる理子。どうやら寝たフリだったみたいだ

春都「どう反応しろと？言ってみ理子りん」

理子「もう我慢できない理子！お前の全てが欲しいとか・・・俺のマグナムが（ｒｙ」

春都「そういうのはＲ１８のほうでやらなきゃ」↑メタい

理子「あ、そっかぁ～・・・」

一体なんの話をしていてなにに納得したのかは置いておこう

春都「理子はいつからここにいたんだ？」

理子「ん～？ハル君がだらしなく気絶した時からだよぉ」

春都「そうか。まったくＨちゃんは少し荒い性格の様だ」

理子「あれは完璧にハル君が悪いよ」

春都「何が？」

理子「ツインテールさんの名前は神崎・Ｈ・アリア、Ｈなアリアちゃんじゃないよ？」

春都「あだ名かと・・・」

理子「そんなあだ名ないよ普通・・・それにいきなり赤ちゃん欲しいなんて言うし」

ジト目の理子

春都「あれはそういう意味じゃなくてだなぁ～・・・」

理子「じゃあどういう意味？あれは完璧にプロポーズだよ」

その額には薄らと青筋（怒りマーク）が見える

春都「あ～・・・場を和ませようとしてだなぁ～・・・」

理子「へぇ～・・・ハル君は場を和ませるためにプロポーズしちゃうんだね」

視線はもはや絶対零度・・・

理子「ハル君への好感度が急降下だよ、このままだとＢＡＤＥＮＤ直行だよ・・・」

さすがの春都も理子がふざけてこんな事を言っているのではないと気付く

目がマジだ。

いつもの理子からは考えられないような威圧感というのだろうか？

それがヤバい

春都「・・・だが俺はそんな状況を覆すようなイベントを発生させてやるぜ」

理子「・・・へぇ。で、なに？」

春都「朝の約束だ。理子、デートするぞ！」

ヤンデレ？いいえ、デレヤンです（後書き）

ちわです鈴ノ音です。
どうでしょうか？そもそも読まれているのかこの小説。
とりあえず楽しんでもらえればいいのですが・・・
意見や要望、その他に聞きたい事があればお願いします
コメントお待ちしております！

次回は理子りんとデートぉぉおおっ！！！！

青い春の1ページ

春都「理子、デートするぞっ！」

その一言で始まったデート・・・

春都「といっても何の計画もないんだよな」

理子「・・・」

理子はジト目だし、じゃべらないし・・・

どうしたものかなぁ～。

あ、そうだ。

春都「手・・・つなぐか」

理子「！！」

春都は理子の手を優しく握る

理子「・・・っ／／／」

春都「ん～・・・なんか違う。あ、こうか」

そう言うと春都は手の握り方を変えた

それは俗に言う　恋人つなぎ　と言うやつだ

理子「っ！！は、ハル君！？」

それにはさすがにだんまりを決め込んでいた理子もすかさず顔を赤くしながら口を開いた

春都「やっとしゃべったな。だけど、だからといってこのつなぎ方は変えないぞ？」

理子「むぅ・・・これだけじゃ理子の心の傷は癒えないんだよ？」

春都「じゃあ理子はなにがしたい？」

理子「ハル君と一緒にパフェが食べたい！」

春都「パフェ？別にいいけど・・・」

理子「じゃあ行こっ！」

理子はそう言うと走り出した

春都「ちょ、理子落ち着け！パフェは逃げないぞぉ～！？」

―――――――――――――――

春都「・・・なるほど」

こういう事かぁ～・・・

目の前に置かれたどでかいパフェ。カップル様限定と言われて付い

てきた、飲み口が二つ付いているストロー（正式名称　ベアストロー）が浮かんだジュースが運ばれてきた

理子は最初からここに来るつもりだったのか

理子「ハル君、理子ジュース飲みたい」

春都「目の前にあるだろうが」

理子「このストローは二人で吸わなきゃ飲めないんだよ♪」

な、なんと・・・

理子「ん～♪」

ストロを咥えこちらを見る理子

上目づかいとか・・・いいな、おい

春都「や、やらなきゃだめ？」

理子「ん～っ！！」

先ほどの　ん～　とは違い、どうやら怒っているらしい・・・

春都「わかったから・・・ほら」

春都は顔を前に突き出しストローを咥えた

ちゅ～・・・

そんな音と共にグラスのジュースが減っていく

理子「ちゅぱ・・・」

理子がストローを離すと同時に春都も口を離す

う～む・・・これは意外と恥ずかしいな

ストローを咥える際に理子との距離が近くなる。近くなると理子の甘い香りが鼻腔をくすぐる。

この香りは思春期真っ盛りな高校生・・・つまり春都にも

春都「じゅる・・・」

・・・どうやら春都には目の前の大きなパフェしか見えてないようだ

理子「もぉ～ハル君、子供過ぎだよ～・・・ハル君あ～ん」

理子は軽く怒りながらもスプーンで生クリームを取り春都の口に近づける・・・

春都「ぱくっ！！」

勢いよく食いついた。春都は甘いもの・・・特に生クリームが大好きで一度、理子の制服のフリフリが生クリームに見えて襲いかかったのはいい思い出だ

春都「♪～」

理子「・・・（可愛いかも・・・）はい次あ～ん？」

春都「はぐっ！！」

もきゅもきゅ♪

理子「か、可愛い／／／」

理子は自身を抱きしめクネクネと身体をよじる

春都「・・・（じぃいい～）」

理子「あ、ごめんねハル君。今あげるか『理子』？」

春都「あ～ん♪」

春都は笑顔で理子の口元へスプーンを運んだ

理子「え？」

春都「あ～ん」

理子「あ、あ～ん」

はむ・・・

春都「どう？」

理子「あ、甘いです・・・」

春都「そっか♪はいもう一回あ～ん」

理子「つ、次は理子の番！」

こうして二人はパフェを食べさせあった
店にいた男共は春都に「リア充爆発しろ」怨念を送ったそうな

～～～～～

春都「さて、もうこんな時間か・・・」

パフェを食べ終え春都達は帰り道を並んで歩く。もちろん手はつないでいる

理子「・・・」

春都「まだ機嫌直らないか？」

理子「（ふるふる）」

頭を横に振る

春都「じゃあどうしたんだ？どこか痛いか？」

理子「違うよ・・・なんか淋しいかなぁ～って」

春都「淋しい？」

理子「うん、もっとこうしてたいのになぁ・・・」

そう呟く理子の顔はとても悲しそうで
それでいて美しかった・・・

春都「変な理子だ」

理子「ひどいな～、理子だってこういう時もあるんだよ？」

頬を膨らまし春都を睨む

春都「だけど理子には似合わない」

「だからもう一度デートをしよう。今度は俺から誘う」

春都は優しく笑う

理子「ほんとっ！？約束だよ？約束だからねっ！！」

春都「はいはい。じゃあ約束の・・・」

この時、春都は理子から借りたゲームのワンシーンを思い出した
ゲームの主人公は約束の時なんかしてたな・・・なんだっけ？

・・・あぁ～思い出した。確かこうだ

春都はつないでいた理子の手を引っ張る

理子「きゃっ！」

そしてもう片方の手を理子の腰へと回す

春都「約束しなきゃ・・・」

春都の顔は理子の顔へと近づく

理子「は、ハル君・・・」

理子の瞳には薄らと涙が浮かび、頬は朱に染まる。呼吸が少し早くなっているのは気のせいか？

理子は瞳を閉じ、唇を少し突き出す

夕日に照らされ、二人の影はどんどんと重なっていく

そして

ちゅ・・・・

理子「ん・・・！」

春都は理子のおでこに軽くキスをした

春都「約束のでこちゅー完了！」

そう言う春都はすっきり爽快笑顔☆

理子「う、うぅぅうううううっ！！！」

ポカポカポカ

理子は涙目で春都の胸を叩く

春都「怒るな怒るな、唇は本当に好きな人にしてもらえ」

春都はそう言うと走り出す

理子「ハル君のばかっ！バカッ！！大馬鹿ぁ～っ！！！」

それを理子が両手を挙げながら追いかける

今日はそんな青春の１ページを紹介・・・・・

青い春の1ページ（後書き）

ちわです、鈴ノ音です。

理子りんキャラ崩壊してね？

感想、意見要望お待ちしております！

実はこの部屋・・・　アレ　が出るんだ・・・（前書き）

今回はオリキャラが出ます

実はこの部屋・・・　アレ　が出るんだ・・・

理子との追いかけっこを終えた春都は自分の部屋へと帰りリビングでお茶を飲んでいる

春都「ずずず・・・ふぅ、世界は平和だなぁ～」

今日の朝とんでもない事件にあっているのにコイツは馬鹿なのだろうか？

春都「ようかんが食べたい・・・待てよ？確かこの前～」

そう言うと春都は立ち上がりキッチンへと駆けてゆく

春都「ふふふ・・・見つけた！この前買った高級ようかん！！」

たかがようかんでここまで喜べるのはある意味才能かもしれない

春都が一人で大はしゃぎいていると・・・

ピンポーン

来客を知らせるドアチャイムの音がした

誰だろうかと思いながらドアを開けると

キンジ「よぉ・・・」

そこには疲れた顔をしたキンジがいた

―――――――――――――――――――――

春都「はいよ」

とりあえずキンジを部屋に上げお茶をだす

キンジ「悪い・・・ずず・・・はぁああ～・・・」

キンジは一口お茶を啜った後に大きなため息を吐く

春都「どうしたキンジ、なんかあったか？」

キンジ「色々ありすぎだろ・・・武偵殺しとか」

春都「ずず・・・でもそれじゃないんだろ？」

茶を啜りながら春都は目を細める

キンジ「・・・神崎のヤツが部屋に押し掛けてきたんだ・・・」

春都「ほぉ・・・」

キンジ「いきなり来たと思ったらドレイにれだの、強襲科（アサルト）で自分のパーティに入れとか・・・くそ、意味分からんっ！！」

春都「“アレ”を見せてたからなぁ」

春都が言うあれとは、キンジが持つ特性の事。
ヒステリア・サヴァン・シンドローム　というらしいのだが、詳しく説明するのは面倒なので軽く説明すると
性的に興奮するとキンジは、この状態になる。
この状態のキンジは超人的に強くなり、そして・・・キザ男になるのだ！

キンジ「・・・本当に厄日だ今日は」

春都「落ち込むなキンジ、なんとかなるさ☆」

キンジ「他人事みたいに・・・神崎のヤツ、お前のことも言ってたぞ？」

春都「へ？」

ようかんを食べようとしていた春都は素っ頓狂な声をあげる

春都「いやいや、俺はただのEランク武偵だぞ？」

キンジ「俺もだ」

春都「いやでもさぁ～・・・」

キンジ「諦めろ」

まいったな・・・春都は苦笑いしながら頬を掻く
帰る前にした理子との会話を思い出す

―――――――――――――――――――――

理子「いいハル君、アリアに手を出しちゃだめ！」

春都「ださねーよ・・・」

理子「アリアはキー君とくっつく運命なんだよ！わかった？」

春都「あ～、はいはい」

理子「理子言ったよ？“アリア”には近づかないでって・・・」

―――――――――――――――――――――

・・・あの時、理子の真剣でなんだか不安が見え隠れしている瞳が
忘れられない

春都「あ～・・・やっぱ無理だわなぁ～」

もぐもぐとようかんを食べる春都

春都「俺とHちゃんは１００％合わない」

キンジ「なんでだよ」

春都「キンジ、俺はさ好きな言葉が3つあるんだ」

「『ムリ』　『疲れた』　『面倒くさい』　この3つ。普通っぽくていいだろ?俺にピッタリだ」

そう言う春都はもう一つようかんを楊枝で刺し口に運ぶ

キンジ「なにが俺にピッタリだ・・・お前ほど普通じゃないヤツなんかいねーよ」

春都「普通も普通、超ノーマルだぜ?俺は。おっと急須にお茶がないな・・・淹れてくる」

春都はキッチンへと歩いて行った

キンジ「それにしてもなんでこの部屋は誰もいないんだ?」

キンジが先ほどから思っていた事を春都に聞く

この部屋は大きく自分が使っている部屋と同じ4人部屋だった

春都「あ~、みんな違う部屋行っちゃったんだよ」

キンジ「なんで?」

春都「出るんだよこの部屋」

キンジ「はぁ?なにが?」

春都「お前、出ると言ったらゴキブリか幽霊のどっちかだろ」

春都はポットを押しながら言う

春都「この部屋、出るんだ　“幽霊”　が」

それを聞いたキンジは少しびくつく

キンジ「ば、馬鹿言ってんなよ、幽霊なんているわけないだろ」

そう言うキンジだがやけにキョロキョロし始める

そしてキンジはある一つのロッカーで目がとまった

キンジ「（ゴク・・・）」

「がたっ！」

キンジ「（びくぅっ！！）は、春都！？その幽霊ってどこに出るんだ？」

春都「あ？ロッカーだよ」

キンジ「（お、おい・・・まじかよ・・・）」

キンジの顔はみるみる青くなる

「がら・・・」

ロッカーがひとりでに少し開いた

キンジ「は、春都？まだかっ！？」

春都「待て、今ようかんをだな・・・」

そしてその隙間から白い手が・・・

キンジ「春都！！早く！！幽霊がっ！！！手がぁぁあああっ！！！！！！！！」

春都「あ？どうしたキンジ、顔真っ青だぞ」

キンジの悲鳴にも似た叫び声を聞き春都は急須と切ったようかんを持ちリビングに戻って来た

キンジ「手！手がっ！！」

キンジはロッカーを指差し言う

春都「手？」

春都もキンジの指さす方を見ると・・・

うねうね

ロッカーの隙間から出た白い手は何かを探すように動いていた

春都「こら、お客さんを怖がらせるな」

びく！　すすす・・・

春都がロッカーに向かい怒ると手はロッカーの中へ戻っていった

春都「まったく・・・大丈夫か？キンジ」

キンジ「な、なんだあれ！？」

春都「幽霊」

春都は座ると再びお茶を啜り始める

キンジ「おま、幽霊と話せんのか！？」

春都「そーなのか幽霊？」

ロッカーの中「・・・・・・・・さぁ？」

返ってくる返事

春都「どうやらわからないみたいだ」

キンジ「お前しゃべってんだろ！！つーかそれ本当に幽霊なのかっ？！」

春都「自分で幽霊って言ってたぞ？」

キンジ「・・・あの幽霊さんとやら、ロッカーから出てきてくれないか？」

キンジは軽くビビりながらも会話を試みようとする

ロッカーの中「・・・」

返事は返ってこない

春都「ずず・・・」

キンジ「・・・」

長い沈黙が続く

春都「ようかんやるぞ？」

ガラ！

その一言でロッカーが勢いよく開き、そして・・・・

幽霊？「・・・・」

小さい銀髪の少女が姿を現したのだった

幽霊幼女

幽霊？「・・・」

その幽霊？容貌はとても幼く長い銀の髪がとても美しい。
顔はまるで人形のように整っていて、目はたれ目

たたたっ

銀髪の幽霊は小走りで春都に近寄り

幽霊？「・・・」

座った

幽霊「はむはむ・・・」

自称幽霊ちゃんはようかんを可愛らしく食べていく

キンジ「・・・春都？」

春都「なんだ？キンジ」

キンジ「誰？」

春都「・・・・」

春都は目を閉じて良く考える。彼女はいったい誰なのか・・・
そして出た答えは

春都「幽霊？」

疑問形で返ってきた

キンジ「・・・名前はなんていうんだ？」

キンジは春都は役に立たないとわかったらしく、彼女へと質問する

幽霊？「・・・・・・・・・ユウ」

キンジ「ユウ？幽霊じゃないのか？」

ユウ「・・・レイ」

ユウという少女がそう言うと

ガラ・・・

幽霊２「・・・ぐす」

半べそ気味の少女がロッカーから現れた

キンジは心の中で

・・・あ～、なんとなくわかった。こいつらは幽霊じゃない

ユウとレイっていう名前なだけだ

と呟いた。

キンジ「改めて・・・二人の名前は？」

幽霊1「ユウ」

幽霊2「レイ・・・ぐす」

キンジ「・・・だそうだ」

春都「そうか」

春都は興味なさそうにお茶を啜る

キンジ「なんでお前はそんなに興味がないんだ」

春都「俺、コイツらの事知ってるし。コイツらがロッカーに出る幽霊の正体・・・まぁ幽霊じゃないんだけど」

二人の顔を見ながら呟く

キンジ「結局コイツらは何者なんだ？」

春都「ロッカーに住みついている双子姉妹。趣味はネットサーフィン、ゲーム、その他色々・・・得意技は料理の盗み食い」

ユウ「ずず・・・」

レイ「ぐす・・・」

キンジ「・・・なんでロッカーの中に住んでいるかは？」

春都「知らん」

キンジ「・・・・・はぁ・・・」

長い沈黙の後、キンジは頭を押さえながら深いため息を吐いた

キンジ「本当にお前は・・・仮にこの二人が危険人物だったらどうする気だ？」

春都「どうもしないぞ？コイツらがなんだろうと俺は構わないし、・・・し・・・（ボソ）」

キンジ「なんだって？」

春都「なんでもないよ、とりあえず俺はコイツらを気に入ってるんだ」

この可愛い容貌も、双子ってところも、俺の“役に立つ”ってところもな・・・

俺はそう言い無表情でようかんを食べるユウ（銀髪の子）

さっきから半べそかいているレイ（黒髪の子）

の頭を優しく撫でた。

ユウ「・・・・もぐもぐ・・・」

レイ「やぁ～！！」

春都「お前はなに怒ってんだ」

レイ「春都が怒った・・・」

春都「お前がキンジを脅かすからだろうが」

レイ「暇だったんだもん・・・」

春都「・・・はぁ。さっきは悪かったなキンジ」

春都は苦笑いしながらキンジに謝る

キンジ「別にいいさ。（結構怖かったけどな・・・）それにしてもなんか兄妹みたいだな」

春都「そうか？」

キンジ「どこからどう見ても兄妹だよ」

そう言うとキンジは席を立つ

キンジ「そろそろ帰るわ。アイツもう帰ったかもしれないし」

春都「そうか。まぁいつでも遊び来てくれ、待ってるからさ」

キンジ「あぁ、また今度な」

キンジはそう言い残し帰って行った

春都「兄妹・・・か」

他の人間にはそう見えるのか

春都「ユウ、レイ、仕事だ。」

二人「「（ぴく）」」

先ほど、部屋に流れていたゆったりとした雰囲気はその一言で一瞬にして変わる

春都「神崎・H・アリアについて調べろ。奴の情報全部」

ユウ「・・・報酬は？」

春都「報酬？そうだな・・・レイなにがいい？」

レイ「ごはん！！」

春都「だそうだ」

レイ「・・・了解。・・・（レイの馬鹿）」

本当に役に立つよ。

これでHちゃんの目的がわかる・・・さぁいったいHちゃんはなにがしたいんだ？・・・

キャラ紹介（前書き）

タイトル通りキャラ紹介です。

キャラ紹介

ちわです鈴ノ音です。
この小説を書いている者です

読んでくださっている方々・・・楽しんでもらえているでしょうか？
楽しんでもらえているならば光栄です

お気に入りに登録してくださった方々、ありがとうございます。
メッセージが送信できる方にはお礼のメッセージを送らせてもらってます
迷惑だったらすみません・・・

とりあえず主人公、オリキャラの説明を・・・

・春都

この小説の主人公。　探偵科　ランクはＥ
身長は１８０？ぐらい
主に使う武器は不明　大抵のモノなら余裕に扱える。一度だけ日本刀を使うのをキンジが目撃

中途半端というかいい加減というか・・・正直掴みどころがない性格をしており、どんな人間にも合わせる事ができる。
キンジとは入試試験の時に春都が一方的に気に入りキンジを親友と呼ぶようになる
軽く真剣になると口調が少し変わる

他にもチートっぽい能力を検討中・・・

ユウ・レイ

オリキャラ
春都の部屋のロッカーに住んでいる双子の姉妹。身長はアリアよりもう少し小さい、だが胸は・・ごはっ！？

春都の部屋のルームメイトが次々と逃げ出した原因。
幽霊と思われていたが、ある日春都に発見される
見た目はただの子供だが、正体は伝説の情報屋。
情報収集やハッキング等の能力に長けよく春都に仕事を頼まれる。
通常の場合、高額な報酬を請求するのだが住まわせてもらっている
恩を感じているのか春都には比較的に安い報酬で仕事をこなす

こんな感じですかね？
ちなみにこの作品のヒロインは理子りんです。
他にも誰かいるか考えているんですがね～・・・

ちなみに鈴ノ音は銃の名前とか全然詳しくないです。
知ってるのデザートイーグルくらいだもん

鈴ノ音、今原作頑張って読んでます！！
きっとどこかでおかしいところでてきますし、ちゃんとやらなきゃ・・・
あと多分、原作通りにならないかも・・・

こんな作品ですがどうかよろしくお願いします！！！

意見要望、感想質問お願いします

ＷＡＷＡＷＡ～♪

神崎・Ｈ・アリア

身長１４２センチメートル
専門科目　強襲科　ランクＳ
１４歳からロンドン武偵局の武偵としてヨーロッパ各地で活躍、狙った相手を９９回連続で全員逮捕。その間１度も犯罪者を逃がしたことがない・・・
武器は二丁拳銃と小太刀二刀。二つ名は「双銃双剣のアリア」

くだらん・・・俺が知りたいのはそんな事じゃないぞ？

春都はユウとレイが集めた情報資料を眺める
そして春都はある場所で目をとめた

神崎かなえの事が書いてある部分だ

懲役８６４年ねぇ～・・・終身刑と同じだろこれ。
その資料には神崎かなえがしたとされる罪が書き記されている
その中には武偵殺しの罪もあった

資料を読み進めるにつれ、彼女の目的が見えてきた

なるほど、Ｈちゃんは神崎かなえ・・・自分の母の冤罪を晴らすため罪を着せたとされる秘密結社『イ・ウー』のメンバーを追っていると。

だからHちゃんはそれに協力してくれる仲間、ドレイを探している。
いや、Hちゃんじゃないな。

ホームズちゃんは・・・ワトソン君探し（相棒探し）でもしてるのかねぇ～・・・

俺は軽く笑いながら読みかけの資料を閉じる

春都「面白いな・・・ホームズか、もしかしたらリュパンもいたりして・・・な～んてな」

――――――

？？？「くしゅっ！」

――――――

キンジ、本当にお前は面白い奴だ。
お前は随分と面倒くさそうな事に巻き込まれているぞ？
お前の意思には無関係でな・・・
春都はベランダに出て夜空を見上げながらそう思った

――――――

ｐｉｐｉｐｉ・・・・

目ざましが鳴りベットから出る
昨日はベランダで星を見た後、すぐに寝た

今日もまた面白い事が起きればいいんだけどな。まぁキンジといれば嫌でも起きるか

俺はとりあえず朝食を作るため、寝室から出てリビングへと向かう。
すると・・・

ユウ「すぅ・・・」　レイ「くぅ・・・」

そこにはリビングのソファーの上で丸まって寝る二人の姿があった
机の上にはまだ俺が読んでいないHちゃんについて資料が机の上に散乱している

春都「・・・運んでやるか」

一人ずつお姫だっこをしてやり、先ほどまで俺が寝ていたベットに寝かして毛布をかけてやる

春都「さんきゅ・・・・」

二人をベットに運んだあとはいつものように朝食を作って食べ、学校へと向かった

ふむ、今日はいつもより随分と出るのが早い。
これなら完璧に遅刻はないな・・・　そんな事を考えていると

前に知っている後姿があった。間違いない、あれは我が親友キンジと暴力魔のHちゃんだ

一瞬声をかけようか迷ったが・・・ふっ、二人の大切な時間を割こうとするほど俺は馬鹿じゃない

春都「あばよ親友☆」

前の二人を追い越しキンジへウィンク。

キンジ「なっ！おい春都！！」

春都「ごゆっくりぃぃ～！！！」

キンジ「待て馬鹿っ！」

一日一善・・・やはりいい事するに限るな！でもキンジの奴、俺に向かって馬鹿とか言わなかったか？

・・・気のせいだよな☆

春都「おはよ～っす」

理子「あ、ハル君おはよ～？」

飛びついてくる理子をヒョィっと避け

春都「はい、おはよー理子りん」

理子「うん！おはよーハルくぅん！！」

春都「あぁ、おはよー理子りん♪」

ヒョイ

理子「おはよ～！！ハル君っ！！！」

春都「ちょっとしつこいぞ？理子」

理子「ハル君が避けるからだよ～！」

両手をあげて怒っている事をアピール

理子「ふふ・・・こうなったら理子の真の力を見せる時が来たみたいだね・・・」

理子は不敵な笑みを浮かべる

理子「ふふ～・・・この理子海王の力見せてやる！くらえ～グルグルパンチ！」

とある漫画の技をパクリ襲ってくる

春都「まさか理子は海王の称号を持っていたのか・・・っ！ふっ・・・いいぜ、なら俺も見せてやる！」

理子「そ、その構えは～！！」

春都「トリケラトプス拳！」

ここまで悪ノリしてくれると清々しいものである・・
こうして中国４０００年の歴史が崩壊し繰り出された攻撃と、魔術師範馬刃○の拳法により創られたトリケラトプスが今まさにぶつかろうとしている

理子「ぐるぐる～！！」

春都「トリケラトプス・・・と見せかけてベアハッグ～♪」

そう言うと俺は理子を抱きあげた

理子「きゃぁ！？・・・む～これベアハッグじゃなくてだっこだよぉ～」

春都「理子は軽いなぁ～♪」

笑いながらくるくると回る

理子「ひゃ～♪」

キンジ「・・・お前らなにやってんだ？」

気が付くとHちゃんと一緒に登校していたキンジが俺達を見ていたまるで馬鹿を見るような目で・・・

理子「おっはよ～！なにって、だっこだよぉ～」

春都「違う、ベアハッグだ。青春はできたか？キンジ」

キンジ「あぁどこかの馬鹿な！春都の！おかげでな。まったくいい迷惑だ」

春都「どこかの馬鹿って言ってるけど俺の名前を強調して言ってる！！俺がその馬鹿の正体！？」

キンジ「よくわかったな、馬鹿のくせに」

キンジの冷た～い視線が刺さる

春都「き、キンジの信頼が・・・俺に対する信頼がぁ～・・・」

わざと崩れて見せる
もちろん理子に危険がないように

キンジ「もともとお前に対する信頼なんざこれっぽっちもないがな」

グサリ・・・
ふっ・・・・意外に傷つく　　ｏｒｚ

アリア「コントはそれくらいでいい？」

どこから可愛らしいアニメ声が聞こえてくる
その正体はＨちゃん、明らか俺を睨んでるね～

スク・・・俺は立ち上がり

春都「おはようHちゃん♪昨日はよく眠れたかい？」

春都は先ほどとは態度が一変、笑顔となる

アリア「・・・まぁまぁよ」

春都「そうか、寝不足は美容の敵！とか言うし気を付けてね」

アリア「考えとくわ」

理子「・・・理子は昨日徹夜しちゃった～」

その一言で再び俺の視線は理子へと移動する

春都「またゲームか？」

理子「♪　えへへ、イベントＣＧコンプするため頑張っちゃったのですビシっ！！」

理子は両手で敬礼

春都「こら、そういうことするともうゲーム買ってやらんぞ？」

理子「や～ん！もう徹夜しないぃ～！！」

理子は俺の腕に絡みついて頬を擦りつける

理子はこの身長のせいでＲ１５系のギャルゲー等は売ってもらえず、よく俺と買いに行ったりするのだ

春都「猫のしぐさに似てるな・・・よし、これからは理子りんじゃなくて理子にゃんと呼ぼう」

理子「にゃん♪」

春都「お～よしよし、理子にゃんは可愛いなぁ～」

理子「ごろごろ～・・・？」

・・・ふぅ。さて今日も頑張っていきますかねぇ～・・・

ＷＡＷＡＷＡ～♪（後書き）

ちわです。
お気に入りの数が増えてとてもうれしいです
意見、感想、要望などお書きください！！

嘘の本当

春都「はぁ～・・・終わった」

授業が終わり背伸びをする

春都「さて、今日は依頼(おしごと)でもこなすとするか・・・キンジはなに選んだ?」

キンジ「猫探しだ。悪いが早く行かせてもらうぞ?あの疫病神から一秒でも早く逃げたい」

春都「Hちゃんの事?」

キンジ「そうだ!もう行く、じゃあな」

キンジはそう言うと早足で行ってしまった

ちぇっ・・・今日はキンジと一緒にやろうかなと思ったのに

春都「しょうがない俺は・・・これだな。“夫の不倫調査”・・・」

おもしろそうだな・・・

理子「夫の不倫調査・・・なんかおもしろそうだねぇ～」

理子の声がしたと思ったら後ろから顔を突き出し俺の依頼内容を見ていた

春都「なんだ、ランクAはAなりの依頼をこなせよ?」

理子「冷たいよハルくぅ〜ん・・・キー君なんかアリアと一緒に行ったよ?」

春都「Hちゃんは強襲科だろ?なんで・・・」

理子「きっとデートだよ!だからぁ〜・・・理子達もでーt・・・あれハル君?」

春都「ふむ・・・どうやらこの時間帯に夫と不倫関係かもしれない女性が来るのか」

俺は軽く理子を無視し歩き始める

理子「待ってよハル君〜!」

春都「・・・はぁ。なんでついてくるんだ理子」

理子「理子とハル君は一緒にいる運命なのです♪」

俺と理子はとりあえず依頼主の夫がよく通るという道をブラブラと歩いている

春都「邪魔するなよ?今日の飯にありつけなくなる」

理子「了解ですビシッ！！」

春都「まったくお前は～（どんっ！）おっと・・・すみません」

理子と話していたせいで前からくる男性とぶつかってしまった

男性「いや、こちらこそすまない。怪我はないかい？」

春都「大丈夫です。では・・・」

そう言い頭を下げて再び歩き始める

理子「大丈夫？」

春都「あぁ。さて、少し疲れてきたから喫茶店にでも寄るか」

理子「わーい！理子ショートケーキ食べたい！」

春都「いいな、俺は・・・チョコレートパフェにしようかな」

そんなことを話しながら俺達は近くにある喫茶店へと入った

理子「おいしぃ～♪ハル君もあ～ん・・・？」

春都「はむ・・・やっぱり生クリームは最高だな！はいあ～ん・・・」

理子「はむ！ん～・・・ハル君のチョコパフェもおいしいね～」

春都「そうか」

こうして理子と俺は世間話などして時間を潰した

春都「さて、そろそろ帰りますか」

俺は席を立つ

理子「え？うん」

そして会計を済まし店から出ていく。もちろんおれの奢りだ

理子「ねぇ依頼は大丈夫？さっきのお店に依頼主の旦那さんいたよね？」

隣を歩く理子は不思議そうな顔をして訪ねてくる

春都「ん？大丈夫。旦那さんは白、いい人だったよ」

理子「え？どういう事？」

春都「これ付けといた」

春都はそう言うと小型盗聴器を親指ではじいた

実は店に入る前にぶつかった男性・・・それが今回の標的である依頼主の夫。

それでわざと標的にぶつかり盗聴器を取り付けたのだ

春都「他の女性に会っていたのは妻のにするプレゼントの相談。若い子に聞いた方がいいからだそうだ」

頭の上で腕を組みながら歩く

理子「・・・ハル君は本当はスゴい人？」

理子はそう言うといきなり立ち止まる

春都「理子？」

理子「ランクＥの武偵があんな動きできるってスゴいことだよ？それにハル君、キー君が武偵殺しの被害にあった時一緒にいたでしょ？」

自慢ではないが俺は雰囲気を読むのが得意だ

ほんの少しの相手が出す雰囲気を感じ取れる。だからわかる今の理子は理子だけど理子じゃない・・・

裏にいる理子。

時より見せるこの顔・・・瞳の奥にある狂気と深い闇・・・

そう、まるでお前は・・・

理子「ハル君？」

春都「！どうした理子・・・」

気付いた時には理子の雰囲気は戻っていた

理子「なぁ～んでもないよ♪あ、そろそろバス停に着いちゃうね・・・」

春都「また明日な理子・・・」

残念そうな顔をする理子の頭を優しく撫でてやる
そうすると理子はくすぐったそうに目を細めて・・・笑った

理子「うん！また明日ねハル君！！」

そんなことをしていると、タイミングよくバスが来た。

理子「ハル君・・・危ない事はしちゃ　めっ！・・・だよ？」

理子は最後にそう言い残しバスに乗り込み行ってしまった

危ない事ね～・・・いったいなんだろうか？

春都「いい加減でてきなよHちゃ～ん？」

アリア「・・・・気付いてたのね」

しばらくするとピンク髪のツインテール・・・
Hちゃんが現れた

春都「ん？まぁ・・・ね。ここで待ってたの？俺のこと」

アリア「そうよ。」

あ～・・・また面倒な。本当に面倒だ

春都「で？なんか用事？」

振り返った春都の顔は笑っている

アリア「アンタ、“気持ち悪いわ”」

春都「いきなり気持ち悪い！？」

アリア「アンタの表情も感情も。いつも仮面をかぶって自分を隠してるみたい・・・だから気持ち悪い」

・・・あぁ、そういう事ね

アリア「アンタの事調べたわ。まったく役に立たなかったけど・・・」

当たり前だ。俺はキンジみたいに前はランクSでした～みたいのないし？

それにこちらにはチート幽霊さんだっている、俺の情報はほぼ無いに等しい

春都「まぁ俺は普通の人間だしなぁ」

とぼけた様な態度の俺をHちゃんはさらに鋭く睨みつける

アリア「嘘ね。わかるのよ直感で」

直感・・・ねぇ？

アリア「アンタがどんなに隠したって私には分かる！」

そんなんで見破られるなんて面倒くさいな・・・

アリア「アンタ、私のドレイになりなさい！ドレイ2号！！」

いきなりドレイか・・・

流石にビックリだよ

春都「ちょっとまっｔ『拒否権はないわよ！！』・・・」

本っ当に面倒くさい・・・

おそらくこういう奴はどんなに言ったところで聞きやしない。

クソ・・・

春都「俺に何を望む？キンジだけで充分だろ」

一瞬にして感じが変わる春都

そのままアリアの横を通り過ぎて止まる

アリア「手駒は多いほうが決まってるわ。アンタはただ言う事を聞いてればいい」

春都「そんなの他のヤツでいいだろ?俺はパス」

アリア「言ったでしょ、アンタに拒否権はない・・・言う事が聞けないなら」

春都「風穴か?」

俺は笑いながら二丁のガバメントを回して見せる

アリア「なっ!?いつの間に!!」

春都「ちゃんと気を付けてないと・・・ね?」

アリア「調子に乗るなっ!」

アリアは背中に隠してある日本の小太刀を抜き突進してくる

速いな。異常すぎる

ババババ!!

それを少しでも勢いを殺すため先ほど拝借したガバメントで数発足元へ射撃するが、殺すどころか先ほどより速く鋭くなる

やばっ・・・

ビュン！！！

体勢を横にずらし、紙一重で避ける

殺り合うつもりはない、なんとかして逃げる・・・

さてどうするか・・・

バックステップしてHちゃんの間合いから抜け出しながら考える

アリア「諦めなさい！私に狙われたのが運の尽きよ！！」

そう言いまた突っ込んでくる。イノシシかなんかだな、コイツ・・・

突っ込んでくる小さなイノシシをしっかりと見据えて

春都「これ返すわ」

ガバメントをHちゃんに向かい放り投げる

アリア「！？」

いきなりの行動に一瞬戸惑い、そこに少しの隙が生まれる。

その隙を狙わないほど俺は馬鹿じゃない、先ほどと同じように足元へ一発撃ち込む

バン！

しかし先ほどと違うのはHちゃんがつんのめったようにして・・・

アリア「きゃうっ！」

転んだことだ

ころころと転がり・・・

アリア「へにゃ・・・」

止まった

春都「ほらよ、もう一丁返す。」

アリア「うぅ～・・・」

春都「じゃあ帰るわ・・・またなホームズ」

そう言い俺は歩きだした

アリア「私の事調べたのね・・・」

返事はしない、するつもりもない。

アリア「自分自身に嘘塗り重ねて・・・自分を偽ってアンタ何になりたいわけ？」

・・・するつもりもなかったんだけどなぁ～・・・

春都「お前が言うように嘘を塗り重ねて違う自分を創っているとして・・・だ。それが誰にも気づかれなくてそれが俺だと思った時点でそれは嘘じゃなくなるんだよ」

春都「“これは俺なんだよ”本当のな・・・」

一言そう言い放った春都はもう振り向く事はなく歩いて行った
アリアもなにも言う気はないのだろう、その背中を見ているだけだった

春都の姿が見えなくなった頃
アリアは立ちあがりガバメントをホルスターに戻す。
よく見るとガバメントのマガジンは丁寧に抜き取られていた

アリア「・・・むかつく」

その一言が夕日の空に吸い込まれていった

バスジャック

今日は雨が降っている・・・
朝から雨かぁ～、今日はバスで行こうかな
そんなことを部屋の中で考える俺、春都は茶を啜る。

ユウ「はもはも・・・」　レイ「もきゅもきゅ・・・」

幽霊さんは久々に早く起きて朝飯を食べている

春都「しかしバスの時間がわからんな」

しかし、雨程度で日頃の日課である武偵高ダッシュ（春都命名）を休んでいいのか？
いや休んでいいはずがない

こうなったら雨に濡れようが関係ない！水も滴るいい男とか言うしな・・・

さぁ行こうか、ピリオドの向こうへ！！

こうしていつも通りのダッシュ通学をしていると、今まさに出発しようとしているバスを発見。
ぎゅうぎゅう詰めだな・・・あ～乗らなくてよかった

そんなことを思っていると乗る事ができなかったらしい生徒を発見した

つーかあれキンジだな

春都「あはは～キンジぃ～☆」

キンジ「近寄るな馬鹿」

春都「ひ、ひでぇ・・・そんな事よりバス乗り遅れたのか？」

キンジ「・・・あぁ。くそ、いつもより早く出たつもりなんだが」

そう言うとキンジは渋い顔して腕時計を見ている

そこで俺はある事に気付いた

春都「キンジ、その時計狂ってるぞ？」

キンジ「マジか・・・やっぱあの時壊れたのか」

春都「あの時？」

キンジ「前、理子に壊されてな・・・理子のヤツが直してくれたんだが」

春都「ほぉ・・・とりあえず走るぞキンジ」

授業に間に合うため二人で走るが

キンジ「はると、おま・・・速過ぎだ」

春都「何言ってんだ、これでも今日はスピード抑えてるほうだ」

キンジ「狂ってる・・・」

そんな会話をしていると携帯が鳴り始めた

春都「もしｍ『バスジャック発生、大丈夫？』ユウか。俺は大丈夫だぞ」

ユウ『７時１５分の武偵高の通学バスに爆弾が仕掛けられている模様』

春都「根拠は？」

ユウ『武偵殺しが使う電波のパターンと同じものをキャッチした』

いつの間にそんな事を調べたのか・・・

春都「了解・・・切るぞ」

ユウ『気を付けて・・・情報が入り次第また連絡する』

春都「あいよ」

そう言うと俺は携帯を切りキンジの方を向く

春都「キンジ、バスジャックだ」

キンジ「なんだよ。強襲科の授業は5時間目からだろ」

どうやらキンジにも電話がかかって来たらしい
耳を澄ませばどうやら相手はHちゃんみたいだ

『今、声したけど春都ねっ！！』

やべ、気付かれた・・・

『丁度いいわ、アンタも今から来なさい！以上』

プツ・・・

春都「・・・なんだ？」

キンジ「さぁな」

―――――――――――――――――――――――――

そして今俺はまるでＳＡＴやＳＷＡＴに似たような装備をして女子寮の屋上にいる。
これはC装備と呼ばれ『出入り』の際に着る攻撃的な装備だ

屋上には同じ格好をしたHちゃん
階段の廂の下で狙撃科、Sランクのレキが体育座りをしていた

春都「・・・はぁ」

なぜ俺がこんな事に巻き込まれるんだ・・・
キンジはあっちでＨちゃんと話しているので俺はレキと話す事にした

春都「おっはー！レっキ～☆」

レキ「・・・」

レキはただ目を動かして大きなイヤホンを取った

春都「また風の音聞いてんの？」

レキ「はい」

春都「へ～、風の音ねぇ・・・」

俺は目を閉じて耳を澄ませてみる
雨の音、キンジとＨちゃんの声、そして風の音が聞こえてくる

正直こんなことして何か分かるのかと聞かれても答えは普通ＮＯだろう。
しかし・・・

春都「・・・なぁ～んかイヤな感じがする・・・かな？」

そう呟き、軽く笑った

レキ「・・・」

それからＨちゃんとキンジになにやら怒鳴り合う声が聞こえたと思

うとヘリが女子寮へと着陸した

ヘリの乗り俺達は暴走を始めた武偵高のバスを追っているようだ
この部隊の隊長らしいHちゃんの説明は

『車内にいる全員の救助！以上！』だ。

はぁ・・・冗談じゃねーってやつだよ

俺は目を瞑る。これが夢だったらどれだけ良かった事か・・・

レキ『見えました』

インカムからレキの声が聞こえた

俺達から見れば何も見えないだろう、だがレキには見える。
この子の視力は確か両方とも6．0・・・超人的だ

レキが指示した辺りへ降下していくと武偵高のバスが走っていた。
随分とスピード出してんな・・・

アリア『空中からバスの屋上に移るわよ。私はバスの外側をチェックする。バカキンジと春都は車内状況の確認、連絡して。レキはヘリでバスを追跡しながら待機』

テキパキとそう告げるとHちゃんは天井から強襲用パラシュートを外し始めた

ビルなどで囲まれてヘリではそこまで近づくことはできないためバスの屋根にパラッシュ―トを使い降りるらしい

春都「待て。三人同時は危ないからまず二人で降りろ。時期見計らって俺も降りるから」

アリア『・・・わかった』

春都「はぁ・・・Eランクがやる事じゃないぜ普通・・・」

アリア『ブツブツ言わない！』

キンジとHちゃんがパラシュートを使い降りていくのを眺める

春都「・・・俺、このままヘリの中にいたいわ～・・・」

レキ「早く行ってください。」

春都「わかってるって・・・タイミングをだな」

アリア『爆弾らしきものがあるわ！カジンスキーβ型のプラスチック爆弾、「武偵殺し」の十八番よ。見えるだけでも――――炸薬の容積は、３５００立方センチあるわ！」

わぉ・・・バスどころか電車でも吹っ飛ぶぞ

この状況はヤバいと分かっている。

でも正直このまま二人が解決してくれて俺の役目がなくなればなぁ～って・・・考えていたりもする

けどそれは叶わない夢らしい。
いきなり現れたオープンカーがバスの後ろに追突したのだ

春都「ちっ・・・Hちゃん無事か?」

アリア『平気よ、でもさっきのでヘルメットが割れて使い物にならないわ、あとインカムも壊れ・・』

Hちゃんとの会話が切れた。どうやらインカムもやられたみたいだな

春都「まぁ死んでないだけマシだ」

『バリバリバリ!!うおっ!?』

その時、キンジのインカムからガラスの割れる音、銃声、後ろからは生徒達の悲鳴が聞こえた

春都「キンジ大丈夫か?!」

キンジ『あぁ・・・なんとかな』

春都「そうか・・・よかった。」

聞こえてくるキンジの声にほっと胸をなでおろす

春都「今から降りる・・・行ってくるよレキ」

レキ「気を付けて」

そう宣言し勢いよくヘリから飛び降りる

グラ・・・

バスが変な動きをしてなかなか落下地点が定まらない

春都「キンジ、どうした！これじゃあ降りられない」

キンジ『運転手が負傷したんだ、今武藤が運転変わるから安心しろ』

春都「了解、キンジは危ないから中に・・・」

そう言おうとしたがキンジはＨちゃんを心配してか外に出てきてしまったのだ！

っ！！ヤバいオープンカーが・・・

春都「おいっキンジ早く中に戻れ！！」

駄目だ、くそっ気付いてない！！

急降下するが間に合うかどうかギリギリだ・・・っ！！

あと少し、あと少しっ！！

オープンカーに取りつけられたＵＺＩがキンジに狙いを定め・・・

いける！！

俺はホルスターからキンジと同じモデル　バレッタＭ９２を抜き

ガンッ！ガンッ！！

銃弾は見事にＵＺＩに命中したが、どうやら様子がおかしい。神崎がバスの側面へと転がり落ちた

くそ！遅かったか・・・

俺はバスの屋根に降りて状況確認をする

春都「キンジ、神崎は！！」

キンジ「アリアっアリアあぁー！！！」

駄目だ混乱してやがる。
神崎が転がっていた所についた鮮血の跡が雨で流されていく

パァン！

パァン！

二回の炸裂音が聞こえたと思ったたら、オープンカーは急にスピーンを始めガードレールにぶつかり爆発した

おそらくレキが狙撃したのだろう

見れば前方、レインボーブリッジの真横に武偵高のヘリが併走してきている。
そのハッチは大きく開かれ、膝立ちの姿勢で狙撃銃を向けているレキの姿があった

レキ『――――――私は一発の銃弾』

インカムからレキの声が聞こえてくる

『銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない――――』

まるで詩のように呟く

『――――ただ目標に向かって飛ぶだけ』

そのまじないのようなセリフを言い終えた瞬間・・・

レキはその銃口をパッ、パッパッ、と三度光らせた

銃口が光るたびにバスへ着弾した衝撃が伝わる

ガンッ、ガラガラン、と何かの部品の様なものがバスの下から落ちる

レキ『――――私は一発の銃弾――――』

そして銃声

落ちた部品から火花が上がり飛び上がった。そして橋の中央分離帯へ・・・その下の海へと落ちていき

ドウウウゥゥ！！！！！

水柱が盛大に上がった

やがてバスは止まりバスの屋根の上にはグッタリと動かない神崎、

必死にその神埼に呼び掛けるキンジと後味の悪い俺が豪雨に打たれていた・・・

パズルの完成

Hちゃんの傷は奇跡的に命にかかわるものではなかったらしい。
しかしおでこに傷が出来てしまったと聞いた

春都「・・・俺がもっと早く下りていれば・・・どうなったと思う？」

武偵高の屋上、日陰で体育座りをする俺。その横には

レキ「私にはわかりません」

レキも同様体育座りをしていた

春都「・・・くそ、後味悪いなぁ」

レキ「・・・」

俺はなにやってんのかな本当、ここで体育座りしてたところでなにも変わらないだろ？

春都「あ～・・・もう行くわレキ。じゃあな」

立ち上がりレキの頭を軽く撫でる

レキ「？」

春都「俺流の挨拶だ」

そう言い、俺は屋上を後にした

武偵殺しか・・・

ヤツの目的は一体なんなのだろうか。

バイクジャック、カージャック・・・自転車ジャックにバスジャック・・・

部屋に帰りユウとレイに武偵殺しの資料を一通りそろえてもらった

春都「ユウはいつから武偵殺しが使う電波?がなんとかに気付いたんだ?」

ユウ「はむ・・・相手は毎回、減速すると爆発する爆弾を仕掛ける」

今回の報酬であるケーキをパクつきながら説明をする

レイ「そして自由を奪って遠隔操作でコントロールする・・・もきゅもきゅ・・・」

ユウ「その操作に使う電波にはパターンがある。今回もそれをキャッチした」

春都「前回はなんで教えてくれなかった」

レイ「もぐもぐ・・・寝てた」

あぁそうですか・・・

資料を見つめていると武偵殺しとは違う資料を発見した

春都「これキンジのか？」

読めば詳しくその情報が書き記されている

ユウ「春都の友達の事よく知りたかったから」

春都「そうかい」

パラパラと捲っていると

『２００８年１２月２４日　浦賀沖水難事故　死亡　遠山金一武偵（１９）』

確かキンジの兄さんだったはず・・・

・・・“水難事故”

なんか気になる。

この事故についてよく調べてみた

春都「この浦賀沖水難事故・・・これがもしシージャックだとしたら？」

いや、だったらユウが電波をキャッチしているはず。

出していなかったら？

武偵殺し本人がその場にいたとしたら？

まるでパズルのピースがどんどんとはめられていく・・・そんな感じ。

ならこれに関連性は？

春都「なぁ、最新の情報何かないか？」

レイ「情報？ん～・・・あ、そういえば明日神崎・H・アリアがイギリスに帰るみたい」

春都「帰る？・・・おい待て」

バイクジャック、カージャック、シージャック・・・
武偵殺しはこれでキンジの兄さんを仕留めた
そしては再び小さくなる
自転車ジャック、バスジャック・・・ならこの次に来るのは

大きなもの・・・飛行機？

確証があるわけじゃない・・・これは俺の勘。当たっているのかなんて分かるはずない
でももしこの推理が万が一にも当たっているのならば・・・

武偵殺しは再び現れる。武偵殺し本人が・・・

はは、だからどうした？
それがわかって俺になんか得のある事なのか？

『自分自身に嘘無理重ねて・・・自分を偽ってアンタ何になりたいわけ?』

・・・面倒なだけ

春都「なぁユウ・・・」

ユウ「今度は何?」

春都「――――――

キンジの頑張り物語（前書き）

前回の少し変更しました

キンジの頑張り物語

春都「・・・」

静かな日だ。
平和・・・この一言が一番似合うくらいの一日。
でも俺は知っている。
この静けさは嵐の前の静けさという事を・・・
携帯が鳴り、メールが来た事を知らせる
相手は・・・理子か

『ハル君元気ぃ～？理子は今日も元気だよ♪今日は台風が近づいて雨がスゴイ降るらしいから危ないって！！だからあんまりお外に出ない方がいいかも・・・』

まだ文面は続いているが、どうでもいいことなので流す
理子・・・お前は本当にいいヤツだよ。いつでも俺を気にかけてくれる・・・

『そういえば前にデートに誘ってくれるって約束覚えてる？理子は密かに期待してるよ？』

そういえばそんな約束もしたな。・・・そのうち誘ってやるか
そんな事を考え俺は理子に軽い返事を送った

安心しろよ理子、この中からは出ないからさ・・・絶対にな。

キンジｓｉｄｅ

アリア「うあっ！」

ナイフによりアリアの側頭部から血がほとばしる。

「あは・・・あはは・・・」

キンジ「おいアリアっ！！」

くそ、どうして・・・どうしてお前が！！

「勝てる！勝てるよ！理子は今日理子になれる！あは、あはははは！！」

理子からの情報でアリアに危険が迫っていると考えた俺はアリアが乗っているＡＮＡ６００便へと突入。

アテンダントを脅し飛行機を止めるよう言ったのだが、この振動・・・動いてる?!
アテンダントは震えながら

「あ、あの・・・ダメでしたぁ」

なんて言いやがる・・・
だがアリアに武偵殺しの話はできる。俺はアテンダントに頼みアリアの席・・・個室へと案内してもらった

ここまでは良かったんだ。
そう、ここまでは・・・

雷を怖がるアリアをなだめていると機内に銃声が響いた
・・・俺の推理通り、武偵殺しが現れたのだ。

俺はアリアに俺の推理を話してやる
推理が苦手なアリアだったが、この話を聞き悔しそうに歯を食いしばる

そこに・・・

ポポーンポポポン。ポポーン。ポポーンポポーンポーン・・・

ベルト着用サインが注意音と共にワケのわからない点滅を始めたのだ

アリア「・・・和文モールス・・・」

オイデ　オイデ　イ・ウー　ハ　テンゴク　ダヨ

オイデ　オイデ　ワタシ　ハ　イッカイ　ノ　バー　ニ　イルヨ

キンジ「・・・誘ってやがる」

アリア「上等よ。風穴あけてやるわ」

アリアは眉をつり上げて、スカートの中から左右の拳銃を出した

そして俺達は一階のバーを目指すのだった

そこに待ちうける悪夢も知らずに・・・

理子「これでやっと理子は自由になれる・・・“あの子”との約束も・・・」

高揚したような声で理子は自分の身体を抱きながら笑う

何言ってんだ・・・

キンジ「しっかりしろ！」

アリア「ぅ・・・」

くそ、切りつけられた傷が深くて血が止まりそうにない。どこかで治療しなければ・・・
俺はアリアをお姫様だっこで抱えて逃げようとする

が、

理子「どこ行く気かなぁ～？」

どうやら無理なようだ。
前を向けば理子が手に持ったワルサーＰ９９をこちらに向けている

キンジ「・・・どうしてだ、どうしてお前が！！」

理子「キンジはそれればっかだな。さっきも言ったよね？私は私にためにオルメスを殺す・・・イ・ウーで手に入れたこの力で！！」

理子・峰・リュパン４世

先ほど理子はそう名乗った。武偵殺しは自分だと、あれはプロローグを兼ねた遊びだとそう言った・・・
４世と呼ばれる事を嫌い、自分を認めてほしいためにアリアを殺そうとしている・・・
意味がわかんねーに決まってるだろ！！

理子「はぁ～・・・キンジはお兄さんの話を聞いただけで役に立たなくなるし・・・せっかくオルメスとくっつけてやったのに」

何か逃げられるチャンスはないか?ほんの少しでもいい、隙を作れれば・・・

理子「考えてる事丸わかり過ぎ。まだ逃げようとしてるわけ?無理ムリ」

キンジ「・・・」

理子「いい眼だよキンジぃ~・・・必死に考えるキンジも最高」

両手は塞がれ、銃は粉々・・・
バタフライナイフ?あのアリアが一撃喰らうような相手に勝てるはずない・・・
もう終わりなのか?

理子「でもこれで終わり・・・――――死ね。――――」

パン!

銃弾がこちらに飛んでくるのが分かる。
この光景前も見たな・・・そうか、バスジャックの時だ
あの時はアリアが命がけで俺を助けてくれた。なのに俺は・・・
俺はアリアになにもできずに死ぬのか?

そんなの!!

「――ダメに決まってるよなぁ?キンジ――」

キンジ「え・・・」

自分の目の前に割り込む人物。
俺を親友と呼び、いつも馬鹿な事をしているヤツ

「くぅ～・・・初めて当たったが防弾制服でも当たれば痛いもんだな！！」

だけど本当はスゴイヤツ・・・

キンジ「春都！？」

春都が目の前にいた

春都「よぅ。キンジの頑張り物語はまだまだ始まったばっかりだろ？」

「さぁ主人公交代！リュパン４世様、デートのお誘いに来たぜ？」

キンジの頑張り物語（後書き）

はしょり過ぎて意味分からん・・・

マトリックス的なあの技（前書き）

いまさらですが

神崎を神埼と書いていた鈴ノ音をお許しください！！

マトリックス的なあの技

キンジ「ば、馬鹿野郎っ！なにやってんだ！！」

どうやらキンジは俺が前に飛び出した事を怒っているらしい

春都「初めて当たったが・・・痛て～な・・・なにって“神崎”みたくキンジを助けたくて♪」

当たった場所を確認・・・多分神崎の頭を狙っていたのかな？

春都「キンジとのお話するのは大好きだが、早くしないと死ぬぞ？」

キンジが抱えている神崎の頭へと目をやる

ナイフで切りつけられたか。

出血がひどい・・・側頭動脈をやられたか？

あらゆることが頭をめぐる

とにかくあのままだと確実にヤバいのはあきらかだ

春都「とりあえずそれを連れて逃げろ」

キンジ「お前はどうすんだ！今の理子はヤバい！！お前も逃げろ！！」

随分と焦ってるなキンジ、何を見たんだ？

春都「却下、お前ら二人をこのバーから逃がす。マキロン貸してや

るか？」

キンジ「いらねーよ！！とにかく逃げ『武偵憲章第一条！！』・・・仲間を信じ、仲間を助けよ・・・」

春都「そう言う事だキンジ、信じろ（ニコッ）」

キンジ「くっ！悪りぃ、頼んだ！！」

そう言ったキンジは神崎を抱き逃げた。
理子はどうやら追いかける気はないみたいだな・・・

春都「よぉ理子・・・いや武偵殺し？リュパン四世のほうがいいかな？」

俺は笑う

――――――――――

キンジ「はぁはぁ・・・」

くそ、あの目はマジの時だ。
俺は走りながら思う

入試試験の時に一度だけ見たあの目・・・
どうしようもなく恐怖を感じるあの目・・・

なんだ?
この不安感は…
いやな胸騒ぎがする…

―――――――――――――――――――

理子「・・・」
理子は何もしゃべらずに俯いている。
微かに手が震えているのは気のせいか?

理子「・・・なんでハル君がここにいるわけ?」

微かに聞こえた声

理子「なんでなんでなんでなんでっ!?なんで春都がここにいるっ!?答えろよ!!」

春都「ん?俺さぁ実は旅行しようとしてたんだ~・・・で乗った飛行機が偶々これだっただけ♪」

もちろん嘘だ。武偵殺しの件を確かめるためにユウに頼んで予約を

してもらったのだ
さらに言うと、武偵殺しの目星もついていた
その優しさが、甘さが仇になったな理子・・・キンジの時計の件もそうだ。
俺があの場にいなかったら気がつかなかったぞキンジは・・・

理子「嘘をつけ!!乗客名簿のなかに春都の名前なんかなかった!!」

春都「あらら～・・・バレた？」

はぁはぁ・・・
随分と興奮してるな

春都「まぁ俺をおバカだと思って甘く見てたのが大きな間違いなんじゃね？」

理子「お前を馬鹿だと思った事なんか一度もない。お前みたいなヤツが一番危ないって事も知っている！」

理子「だからお前に近づいたんだよ！邪魔しないように！私の言う事を聞くようにするために!!」

春都「ふ～ん・・・まぁ知ってたけどね☆色仕掛(ハニートラップ)けってやつだろ？知ってるに決まって引っかかってんに決まってるじゃん♪面白そうだし・・・」

理子「・・・」

春都「でも結構ドキドキはしたぞ？よかったな４世」

ギリっ・・・

理子「・・・そこをどけ・・・」

春都「イヤだ」

理子「どけ！！」

はぁ～・・・子供かお前は・・・

春都「通りたいなら俺をさっきの神崎みたいすればいい」

カチャ・・・

ワルサーＰ９９が俺へと向けられる

だが、手の震えは先ほどより強くなっている

理子「ど・・・け・・・」

春都「？どうした、撃たないのか？」

理子「（ギリっ）～～っ！！」

パンッ！

銃弾は俺に向かって飛んでくる

春都「――――――だけどさ。」

それを俺は上体を後ろに反らし・・・かわす

春都「今日の俺は少々本気だぞ?４世さん」

さぁどうしてやるかな・・・やべおもしれぇ・・・

マトリックス的なあの技（後書き）

感想を書いていただきありがとうございました！！

すごくうれしかったです！

わからない気持ちと刺さる思い（前書き）

なんか・・・
よくわかんなくなってきた・・・

わからない気持ちと刺さる思い

撃ちたくない・・・

最初はただのウザい存在だった。
私の目的に支障をきたす存在かもしれないという認識だけだった
楽しそうに笑う顔が嫌い、優しく話しかける声が嫌い・・・

嫌いだったのに・・・・

彼と・・・春都と話せば話すほど、いればいるほど、もっと話したくなって一緒にいたくなっていった

だから

私はこんな状況を望んでいない
春都が危険にならない様に極力動いた。だけどダメだった・・・

私の目の前に春都がいる

私が一番望んでいない事。
思い通りにいかない事にも春都の言動や態度にも腹が立った
楽しそうに笑う春都の顔を見るのが嫌だった

そして私は感情のまま銃の引き金を引く・・・

パン！パン！

春都「っと・・・」

銃弾が飛び交う
未だに被弾した回数は初めの一度だけ

春都「どうした４世様ぁ～？」

理子「黙れ！！」

こちらへ突っ込んでくる理子を見る
思い出すのは神崎の傷。あれは完璧に刃物によるものだ

さぁ神崎にどうやってあの深い一撃を与えた？

しゅら、しゅるるる！！

春都「！！」

理子ツーサイドアップのテール片方がまるで生きているかのように
動き、そしてどこかに隠したナイフを握り俺に襲いかかった

シャッ！

春都「っ！！」

一撃目はなんとか避けたが、反対のテールに握られたナイフが迫ってくる

キイィインっ！！

俺は制服の裾に隠したナイフでその攻撃を防いだ
金属と金属がぶつかり、耳障りな音がする

これでひとまず安心ならいいのだが、理子はさらに両手の銃で俺に向け

パン！パン！パン！

春都「ちっ・・・」

転がるようにして逃げたが、なんとも厄介な攻撃だ・・・
接近戦では四方向の攻撃に対処しなければいけなくなる

理子「避けてばっかり？春都」

春都「そんな事ないぞ？」

俺はホルスターからベレッタを抜き
そして一気に駆ける！！

理子「お前バカぁ？」

理子がそう言うのは無理もない、この場合接近戦を挑むのは明らかに自殺行為・・・
だが俺はあえて理子につっこんだ

ある時は理子の銃弾を交わし、ある時は襲いかかるナイフをベレッタで受ける

春都「じゃあこんなのどうだ？」

ガスっ！！

理子「かはっ！？」

勢いをつけて理子の額へとヘッドバットを決める
グラつく身体に蹴りを入れようとしたが、理子が後ろへ下がり回避

春都「身長差があるから効いたか？」

理子「はぁ・・・はぁ・・・！」

ガチャ・・・

持っていたワルサーＰ９９が両手から落ちる

春都「フラフラしてんだから動くな」

さっきので脳が揺れたのか。フラフラと今にも転びそうになっている

なのに明らかの敵意を俺に向け俺へと近づこうとする

理子「私は今日、理子になる・・・んだ・・・本当の・・・理子になっ！！」

獣のような鋭い目で俺を睨む

理子「春都にわかるか！？自分の名前を呼ばれない苦しみが！認めてもらえない苦しみがっ！！」

春都「・・・」

理子「どいつもこいつも４世！４世！私は数字じゃない！遺伝子なんかじゃない！！」

ヒュッ！ヒュッ！！

ナイフが複雑な動きをして襲いかかる

春都「言いたい事はそれで全部か？」

理子「あぁ！？春都、お前も気も食わないっ！！」

春都「くっ・・・！」

理子「その余裕そうな態度が！笑顔が！しゃべり方が嫌い！！お前を巻き込まないようにしてやった・・・忠告もした・・・それなのに！それなのにっ！！」

ガシャ！

あまりの勢いに握っていたベレッタが吹っ飛ぶ

これで受け止められる物は無くなった・・・

ならこうすればいいだけだ

バシィィイ！！

俺は暴れるナイフを両手で受け止める

春都「言い終わったな？」

理子「っ！！」

ググっ・・・

自然にナイフを握る手が強くなり、先ほどよりも血の滴る量が多くなる

軽く本気を出してひねり潰してお終い・・・最初の考えは何処へやら

コイツに銃弾の一発も撃ちこめない
撃たないのではなくて撃てなかった。
撃つチャンスもタイミングもあった、なのに無理だった

頭突きで精一杯とか
俺はそんなに優しい人間だったか？

ガチャンッ！

ナイフを奪い取って投げ捨てる
これで終わりか？いや終わってほしい・・・

理子「ぁ・・・」

バランスを崩したようにこちらに倒れそうになるのを俺は咄嗟に受け止めようとした

春都「おい、大丈夫ｋ・・・」

普通の生活に戻りたい。皆が笑っている日常に。
・・・それが無理な事もわかっているんだけどな

もたれ掛かるように俺に倒れ込んでくる・・・

「――ばぁ～か――」

ドスっ・・・

囁くようなそんな声を聞いた瞬間

俺の腹に激痛

春都「ぅっ・・・・！！」

ほらな？終われないし、戻れないんだよ。

俺は腹部に広がる痛みを感じながら思った・・・

刺されるとどの位痛いのか・・・（前書き）

内容ぐっちゃです・・・許してくだしあ

刺されるとどの位痛いのか・・・

良く見れば下腹にナイフが刺さっている

春都「・・・くは・・・」

理子のヤツ、もう一本隠して・・・

ボタボタ・・・

手の出血なんてもんじゃないくらいの血の量。制服も紅く染まっていく

や、べ・・・これは流石にキツい・・・

理子「くふ、くふふ・・・」

くそ、ちゃんとシャツはズボンに入れなきゃってか？

はは、笑えね～・・・

わざと懐に潜り込んで防弾制服の隙間を狙って刺すとか。相手が俺だからやったわけか

春都「っ・・・」

良かったな理子、これでやっと二発目の攻撃成功だ。しかも致命傷に近い傷

ぎゅ・・・

理子「！！」

腕をまわして抱きしめる
お前の話は聞いた、次は俺の番だろ？

理子「離せ」

暴れて抜けだそうとする理子
俺はさらに強く抱きしめ抜け出せないようにしてやる

グッ・・・

春都「俺、には・・・遺伝子とか数字とかよくわからん」

ボタボタと地面に血が垂れる

春都「認めて、もらう？・・・なんで他人に認めてもらう必要があんだ」

春都「お前はお前・・・理子だろっ・・・」

急に身体の力が抜け、膝をつく

春都「ぐ・・・」

理子「うざ・・・春都には何にも関係ない・・・なのに春都はここに来て、私の邪魔した・・・」

春都「はぁ・・・はぁ・・・」

意識が朦朧とする。理子の声が頭の中で反響するように聞こえる
刺された場所はあいかわらず焼けるような感覚・・・

理子「倒れちゃえばいいじゃん・・・オルメス達のことなんか諦めてさ」

理子「痛いでしょ?苦しいでしょ?ツラいでしょ?――他人のために死ぬなんて馬鹿みたいでしょ?――」

春都「・・・」

ギュ・・・

返事はしない、そのかわりにさっきより強く理子に抱きついた

確かに俺は他人のために命賭けられるほど勇者じゃない
それでも・・・人には絶対守りたいモノってのが2、3個くらいあってもいいもんだろ?

理子「・・・そう」

ガスっ!!!

春都「がっ！？・・・」

理子の膝が俺の腹に入っ・・・

ドサ。

理子「ならお前はここで終わりだ。春都」

春都「――――――・・・」

理子が俺を見下ろしながら言う

その手には血塗れのナイフが・・・

おい、待て理子・・・

意識が遠退いてゆく

理子・・・お前、そのナイフ・・・――――――――――――――――

ここで俺の意識は完全に途絶えた。

理子「・・・春都に守りたいモノがあるように、私にも守りたいモノがあるんだよ」

刺されるとどの位痛いのか・・・（後書き）

長らく申し訳ありません・・・

鈴ノ音も受験シーズンに入り全然書けていません・・・

それにテストも近く泣きそう

春都「・・・星、綺麗だ」

一人横たわり星を見る。台風も過ぎてよく空が見えるな

飛行機ジャックの事件は俺が目を覚ました時には解決しており、俺は病室のベットで寝ていた。
その部屋にはキンジ、そして神崎の姿もある
そうか、キンジは神崎を守ることができたか・・・

俺はキンジ達を起こさないよう静かに病室を後にした

医者からは絶対安静と言われたが、とりあえず走って逃げた。

病院に搬送された時は出血などがひどく危険な状態だったらしいが、誰かが応急処置をしてくれてあったらしく、そのおかげでなんとか助かったとか・・・

病院を抜け出した後は一人、公園のベンチでボ〜っとして過ごした。
時間が経つのは早く、空には綺麗な星と満月が見える

俺はポケットから携帯を取り出し電話かける

数秒のコールの後

春都「よぅキンジ、今どこにいんの？」

キンジ『・・・家だよ』

聞こえてくるキンジの声は少し低い

春都「元気かよ」

キンジ『それはこっちのセリフだ。お前なに勝手に病院から抜け出してんだよ」

春都「病院はなんか嫌いなんだよ」

キンジ『怪我・・・大丈夫かよ』

春都「心配すんな、大丈夫だからさ」

キンジ『・・・そうか』

春都「俺はお前の方が心配だけど？」

キンジ『なにが』

春都「お前なんで家にいるわけ？神崎、帰っちまうだろ？」

キンジ「・・・俺には関係ない」

・・・あほキンジ

春都「手を伸ばせば届くのに、掴めるのに・・・何でしねぇんだよ。
・・・俺には出来ない事をお前はできるのに」

俺は自分の守りたいモノすら守れない
だけどお前は違う、キンジはそれができる。できるのに・・・

キンジ『春都・・・』

春都「やれる事やればいいんだよ、後悔なんざ後にしろ。・・・ま
だ俺の言葉は必要か？」

春都「ウジウジしてんじゃねーぞ・・・俺のヒーロー」

キンジ「俺はお前のヒーローになったつもりはねーぞ。・・・用事
ができた、電話・・・切るぞ」

春都「あいよ」

ツー・・・ツー・・・

春都「全力で走ってこいキンジ・・・そんで掴んでやれ、神崎が必
死に伸ばしてる手をな・・・」

俺は一人呟く。
そして月に向かって手を伸ばす

春都「遠いな・・・遠くて掴めない。やっぱ俺はヒーローにはなれないか・・・」

俺のヒーロー（後書き）

テキトーで申し訳ない。

～キンジside

アリアを帰らないように引きとめてから少し後のこと・・・

俺はアリアと共に自分の部屋へと帰って来た。

同居は勘弁してくれと抗議したのだが、前に俺が約束してしまった

・・・最初に起きた事件を一件だけお前と一緒に解決してやる・・・

これのおかげで

アリア「武偵殺しの一件は、理子をまだ捕まえていないから解決になってないでしょ」

などと言われてしまい、結局アリアは俺の部屋に居座る事になったのだ・・・

しかし家に帰ってくれれば・・・

春都「おかえりぃ～♪」

キンジ「・・・」

なんでコイツがいるんだよ・・・

―――――――――――――――

キンジ「なんでお前がここにいるんだ」

春都「いや暇だったからさぁ～。つい・・・ね？」

キンジ「お前は不法侵入って言葉を知っているか」

春都「あ、お菓子買って来たけど神崎食べる？」

アリア「食べる！」

キンジ「話を聞け！！はぁ～・・・お前が落ち込んでると思って心配した俺が馬鹿だった・・・」

春都「ん～・・・意外に落ち込んでたりするぞ？カッコつけといてやられるわ、ナイフで刺されるわ・・・最悪だ」

春都はそう言いながらお菓子をパクつく

アリア「まったくよ！理子のヤツをあそこまで追い込んだのに取り逃がしちゃうなんて・・・ホント最悪！」

今、春都の前で理子の話をするか普通？！

春都「ははっ俺、神崎のそういうとこ結構好きだぜ？」

アリア「はぁ?何言ってんの、おかしくなった?」

春都「お菓子食っておかしくなった・・・ふっ、やるじゃねえか神崎」

・・・やはりコイツは馬鹿なのだろうか

春都「つーか俺の腹の傷見る?結構ヤバかったらしいんだけど・・・」

キンジ「んなもん見たくもないわ」

春都「もしかしてもう飛行機中で見ちゃってる?」

キンジ「そんな事してる暇なんかなかったよ。お前が気絶してる間こっちは必死で頑張ってたんだぞ」

春都「へぇ・・・じゃあキンジ達は俺には“何も”しなかったのな・・・」

キンジ「ぶっ倒れてるお前を俺が安全な場所へ運んでやってなきゃ今頃どうなってたか考えてみろ」

春都「感謝してま~す・・・」

そういう春都の顔はなんだかさっきより嬉しそうな顔をしていた。

・・・本当によく分からんヤツだ

春都「あぁ・・・そういえばキンジ」

キンジ「あ？」

春都「言い忘れてたけど、お前の携帯・・・ヤバいことになってんぞ♪」

そう言うと春都はポケットから俺の携帯を取り出し、渡してきた

キンジ「なんでお前が俺の携帯をポケットに・・・」

春都「そんな事どうでもいいから早く見てみろ」

いや、どうでもよくないだろ。

ったく・・・

俺はひとまず携帯に目をやる

現在の未読メール　４９件。　留守番電話サービス　録音１８件。

・・・全て白雪からであった

『キンちゃん、女の子と同棲してるってホント？』

から始まり

『さっき恐山から帰ってきたんだけどね、神崎・Ｈ・アリアって女

の子が、キンちゃんをたぶらかしたって聞いたの！』

『どうして返事くれないの？』

そして最後のメールには・・・

『今行きます。』

キンジ「っ！？あああ、あ、あ、、あアリアに、にに、逃げろ！！」

アリア「な、なに急にガクガク震えてんのよ・・・」

春都「『武装巫女』が来るからさ・・・キンジ、ケータイはちゃんと携帯しなきゃな♪」

キンジ「なにダジャレ言って・・・うッ。マズい・・・来やがったっ・・・！！」

どどどどどど・・・！！

マンションの廊下に物凄い足音が響き渡っている。

か、鍵を閉めねばっ！！！

俺は走って玄関のドアの鍵を閉める

これで少しは時間を・・・

――――しゃきん！！――――

しかし、そんな金属音と共に玄関のドアは崩れ落ちていった

そしてそこには仁王立ちをしているのは。

巫女装束に額金、たすぎ掛けという戦装束に身を固めた・・・・

キンジ「し、白雪・・・」

がいた。

アリア「ちょ、ちょっといきなりどうしたのよキンジ・・・」

ば、馬鹿野郎!!今顔出したら

白雪「やっぱり――いた!!神崎!H!アリア～!!」

そう言うと白雪は青光りする日本刀を構え・・・そして

白雪「この泥棒ネコ!キンちゃんをたぶらかして汚した罪、死んで償え～っ!!!」

アリアに突進していった

それぞれが歩む道

白雪「よくも！よくもキンちゃんを～っ！！」

ヒュンっ！ヒュンっ！！

アリア「ちょっ！？アンタなにすんのよ！！」

神崎は白雪が振るう刀を器用に避けていく

この刀をブン回している子の名前は　星伽白雪
武偵高校2年B組所属。専門科目は超能力捜査研究科、剣術と鬼道術を得意としている

黒髪ロングでスタイル抜群、しかも正確もいい
まさに大和撫子を絵に描いたような子である。
キンジの幼馴染で、よくお弁当とか作って来てくれたり朝起こしに来てくれたりするとか・・・
まるでギャルゲの幼馴染キャラを具現化したようなくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ

大和撫子＋幼馴染＝最強とんがりコーン☆

おっとあまりの羨ましさに少々混乱してたみたいだ

しかもキンジに近づく女の子を武力で排除しようとするヤンデレ属

性付き・・・

いかんいかん・・・自重しろ俺、これじゃいつまで経っても説明が終わらんぞ!!

生徒会長・園芸部部長・手芸部長・女子バレー部長を兼任し、偏差値４５も満たない武偵高で７５オーバーの優等生で料理も得意・・・まさに完璧超人である

ばちぃぃぃぃっ!!

アリア「ちょっとっ!!キンジ、春都はやくコイツなんとかしなさいよっ!!」

おぉ・・・神崎が真剣白羽取りしてる

白雪「こ、の・・・泥棒猫～・・・っ!!」

アリア「なに・・・さっき、から意味わかんない事言ってんのよっ!この馬鹿女っ!!」

神崎は刀をホールドしたままジャンプ
そして両脚で白雪の右腕を挟みねじり上げにかかる。

白雪「バリー・トードゥね!?」

白雪は神崎の流派を一瞬で見抜き、床を蹴って――――――――――
ばすんっ！！
神崎を絡みつかせたままバックドロップ・・・

凄まじいな、おい。
つーか床思いっきり凹んでね？

白雪「う～っ！！キンちゃんの前からいなくなれ！キンちゃんの前から消えろ～っ！！」

強烈な蹴りが神崎を襲う

アリア「きゃうっ！？」

ごろごろっ、がっしゃん！！

ソファーに突っ込み粉砕・・・

こりゃあ神崎もそろそろキレ・・・

ばすん！ばすんっ！！

キレちゃったよ。

神崎が白雪に向かって発砲

ギギンッ！！

しかし、白雪はいとも簡単に刀で弾き飛ばした。

アリア「キレた！も～キレた！――風穴あけてやるっ！！」

キレた神崎が白雪に突進・・・さらに戦闘は激化していく

春都「あ～・・・そろそろ家帰ろ」

キンジ「おいっ！？」

春都「いや、だって・・・アイツらにちゃんと飯あげないと。ほら・・・死んじゃうじゃん？」

キンジ「ペットみたいにいうな！・・・俺一人じゃコイツらどうにもできないだろうが！！」

ふぅ・・・まったくキンジは

春都「いいか？キンジ・・・」

俺はキンジの両肩に手を置く

キンジ「な、なんだよ」

春都「人間、時として目を瞑らなければならない時がある。それは何時か・・・今しかないだろ」

キンジ「・・・」

アリア「ちょっとアンタ達、援護しなさいよ！パートナーでしょ！！」

白雪「キンちゃん、この女を後ろから刺して！そうすれば全部見なかったことにするから！！あ、春ちゃんこんばんは」

神崎は2本の小太刀を抜き白雪と激しい鍔迫り合いをしながら叫ぶ

春都「こんばんわ。今日も可愛いね♪」

俺は白雪に軽く挨拶をしてキンジの方へ向き直る

春都「どうするかはお前次第だキンジ・・・俺は行く・・・」

キンジ「まっ待ってくれ！俺は・・・俺はどうすればいいんだよ」

春都「・・・お前の部屋には物置があったな・・・“防弾性”の」

キンジ「っ！！」

春都「俺が言えるのはここまでだ。・・・あとはお前が決めろ」

キンジ「・・・わかった。・・・礼は言わないぞ」

こうして俺達は互いの道――――――――――

自分の家、物置へと向かったのだった

お昼話

授業終了のチャイムが鳴る。

あ～・・・やっとお昼だ

春都「キンジ、お昼一緒に食べよーぜ」

キンジ「構わんが・・・お前その顔どうした」

春都「ん？いやぁ～、ユウとレイが・・・」

―――――――――

春都が自分の部屋に帰ってすぐのこと・・・

春都「あの・・・なんで俺は手足を縛られて」

ユウ「・・・わからない？」

春都「正直さっぱり・・・」

ぱちんっ！

ユウの可愛い手で頬をぶたれる

レイ「はりゅと～・・・ひっく・・・ひっく・・・」

レイは俺の背中に貼りついて泣いてるし・・・

ユウ「危ない事しないって約束した・・・」

春都「・・・悪かった。心配掛けたな」

ユウ「だが断る」

春都「え?あのユウさ（ぱちんっ!!）痛!ちょ、待っ!!」

ユウ「春都がっ!泣くまでっ!殴るのをやめないっ!!」

ぺちん!ぱちん!ばちぃぃいっ!!

春都「レ、レイぃぃい~!!助けて~・・・」

レイ「ぐす・・・やっ!」

レイは　ぷいっ!　と顔を背ける

ユウ「春都の!馬鹿っ!!」

ばちぃぃいいいいんっ!!!!

―――――――――――――――――――――

春都「と、こんな感じで3時間続きまして」

キンジ「よく生きてたな」

春都「まったくだぜ。危うくアッチ系に目覚めるところだった」

キンジ「・・・」

でもまぁ・・・感情的になるユウなんて初めて見たなぁ～・・・

とりあえず俺達は学食で俺はラーメン、キンジはハンバーグ定食、神崎は持ち込みのももまんを食べている。

キンジ「さっきの話だが、二人ともすげー怒ってたんだろ?よく許してもらったな」

春都「ずるる～・・・一週間、一緒に寝なきゃならん。さらに一カ月デザートにケーキだ」

キンジ「・・・財布、大丈夫か?」

春都「同情するなら金をくれ」

アリア「もきゅもきゅ」

「遠山君、春都君。ここ、いいかな?」

声をするほうを見るとそこには不知火がいた。

不知火　亮

東京武偵高校2年A組所属。専門科目は強襲科でランクはA。

イケメンでとてもモテる。

格闘・ナイフ・拳銃どれも信用できるバランスの良いスキルの持ち主

不知火は椅子に座る前にキンジの少しズレているトレイを直して

ゴメンよ、と会釈して席についた。

なんとまぁマメなイケメンだこと・・・

「聞いたぜキンジ。ちょっと事情聴取させろ。逃げたら轢いてやる」

そしてさらに武藤が乱入。

武藤　剛気

東京武偵高校2年A組所属。専門科目は車輌科でランクはA。

乗り物と名のつくモノならなんでも乗りこなすことが出来る。

ちなみにこちらは不知火とは違いモテない

キンジ「なんだよ事情聴取って」

武藤「お前、星伽さんとケンカしたんだって?星伽さん沈んでたみたいだぞ、どうしたんだ?」

キンジ「白雪はどうしたもなにも・・・っていうか武藤。お前、白

雪を見かけたのか？」

武藤「今朝、温室で花占いしてたのを不知火が見たって言うからよ」

キンジ「なんだそれ」

春都「花びら一枚ずつちぎって　スキ～、キラ～イ、スキ～、キラ～イってやるやつだ」

キンジ「あぁ、あれか」

不知火「僕に見られてるのに気付いた1時間目の予鈴が鳴ったので占い自体は中断してたけど。なんか涙ぐんでるみたいだったよ？・・・で、なんで別れちゃったの？」

キンジ「あのなぁ、俺と白雪はそういう関係じゃない。ただの幼馴染だ」

面倒くさそうにキンジが言う

不知火「幼馴染、かぁ。はぐらかし方としてはポプュラ―な言葉の選択だね。ウワサでは神崎さんがヤキモチやいて発砲したって聞いたよ？」

ウワサじゃなくて真実だな。発砲したってところだけ・・・

不知火「で僕の読みでは・・・」

春都「キンジと神崎がうまくって女子二人が決闘とか言うんだろ～？」

不知火「さすが探偵科だね、春都君。だって神崎さん強襲科でもとっても楽しそうに遠山君の話ばかりしてるからさ」

アリア「～／／／っ！！」

神崎の顔は真っ赤になり、なぜかは知らないがキンジの顔面に右ストレートを決めた

キンジ「ぶはっ！？」

アリア「ば、馬鹿みたい！あ、アタシが白雪を追っ払ったのは、ヤ、ヤキモチとかじゃないの！キンジはその・・・アタシのパートナーだし。とにかく好きとかそういうのじゃないのっ！！」

神崎はそう騒ぐと席から立ち上がり

アリア「そ、そろそろ行くわよ、春都に馬鹿キンジ！」

そう言ってズンズンと歩いていった。

春都「あ～・・・なんで俺もなんだよ。キンジほら行くぞ」

俺はキンジの手を掴んで立ちあがらせてやる

キンジ「痛っ～・・・ちくしょうアリアの野郎・・・」

不知火「神崎さんに悪いことをしてしまったかな？遠山君もごめんね」

キンジ「あ～気にすんな、アイツはいつもあんな感じだ。はぁ～・・・
・じゃあ俺ら行くわ」

それだけ言ってキンジは神崎の後を追って行った
・・・俺の首元を引っ張って。

手乗りタイガー　灼眼　緋弾（前書き）

→

おわかりいただけただろうか・・・？

なんとか神崎に追いついた俺達はまた話を始める

春都「そういえばキンジ達はアドシアードどうすんだ？まぁ・・・・神崎は体表とかに選ばれてるんだろうが」

アドシアードというのは年に一度行われる武偵高の国際競技会。まぁスポーツでいうインターハイとかオリンピックみたいなものである

キンジ「俺達がやる事はイベント手伝（ヘルプ）いくらいしかねーだろ。アリアはどうする？」

アリア「あたしも競技には出ないわ。拳銃射撃（ガンシューティング）競技代表に選ばれたけど辞退した」

キンジ「へぇ、じゃあお前も手伝いか。何やるか決めたか？」

アリア「閉会式のチアだけやるわ」

キンジ「チア・・・？あぁ、アル＝カタのことか」

春都「ひゅ～・・・これは神崎のパンチラが撮れれば大金持ちになれるな」

キンジ「はぁ？何言ってんだ」

春都「知らないのか？人気ある女の子の写真はファンのなかで高く売買されてんだよ。神崎もモチロンそのなかに入ってる。その神崎がチアの服着てパンチラしてる写真撮ってみろ・・・ぼろ儲けだ」

ちなみにアル＝カタというのはイタリア語の武器（アルマ）と日本語の型（カタ）を合わせた武偵用語で、ナイフや拳銃による演武をチアリーディング風のダンスと組み合わせてパレード化したものだ。
それを女の子達は「チア」と呼んでいる

アリア「あ、アンタそんなの撮ったり売ったりしたら風穴あけるわよっ！？」

春都「久々に聞いたぜその言葉。そこは神崎にバレないように撮るさ」

俺はそう言い、カメラを構える真似をした

アリア「その前に風穴あけてやるっ！！」

神崎はホルスターからガバメントを抜いて

ばきゅん！ばきゅん！

発砲。

春都「おっと。冗談だって・・・半分くらいは」

アリア「じゃあ残り半分はなんなのよっ！！」

春都「あはは～」

俺と神崎は追いかけっこを開始。キンジの周りをぐるぐると回る

春都「あ～、そういえば白雪はどうすんだよ。不知火の話ではなんか落ち込んでたんだろ？」

キンジ「どうもしねーよ。というかその話だが、俺は今朝の予鈴が鳴る時に一般校区の廊下で白雪に出くわしてるんだよ。アイツ挨拶もしないで女子トイレ逃げ込みやがった・・・」

・・・どういうことだ？

キンジは予鈴が鳴っている時に白雪に会っている。

だが、不知火は予鈴が鳴るまで白雪は温室で花占いをしていたと言っていた

キンジ「きっと不知火が見間違えんだろ」

本当にそうか？

・・・

アリア「みゃっ！？！？」

ぼすんっ

急に俺が走るのをやめてしまったので神崎が俺の背中に顔をぶつける

アリア「なんれ急にとまるのよ！！」

神崎は鼻をぶつけたのか、鼻を押さえて涙目で怒る

春都「あぁ・・・悪りぃ。少し考え事をな・・・」

アリア「？」

そんな事をしているとチャイムが鳴り昼休みの終わりを告げる

キンジ「そろそろ戻るか」

春都「そうだな」

アリア「あ、そうだ言い忘れてたけど、明日の朝7時に集合ね」

キンジ「あ？なんで・・・」

アリア「アンタの調教に決まってんじゃない」

春都「ぐふふ、いやらしいですな！お前ら」

キンジ「お前は何を言っているんだ。アリア、せめて訓練と言ってくれ」

アリア「春都、アンタも来るのよ」

春都「へ・・・？いや、俺は痛いの苦手だし。ちょっと遠慮しときます」

アリア「来なかったらキンジに風穴あくから」

キンジ「なっ・・・」

春都「ちっ・・・わかったよ。行きゃ―いいんだろ」

こんな感じで話は終了した。

～そして朝～

春都「すみませ～ん遅れました～・・・」

アリア「遅い!!２０分も遅刻よっ!!」

チアの服を着た神崎が俺に向かって怒鳴る。つーか何故チアの服着てんだ?

春都「悪かったって」

キンジ「お前にしては珍しいな。遅刻なんて」

そう言うキンジの頭にはタンコブがあった

春都「あぁ・・・ユウとレイが寝ぼけて離してくれなくてな、気付いたら二度寝してた。それよりそのタンコブ・・・」

アリア「真剣白刃取り(エッジ・キャッチ)の練習してんのよ」

春都「なんでまた」

アリア「ダメキンジから覚醒キンジに変える特訓よ」

覚醒キンジ・・・ヒステリアスモードの時のことを言っているのか？

だがそれになんで真剣白刃取りが必要なんだ？

まぁ神崎のことだ。なにか変な推理でも立てたんだろう

春都「へぇ。でその成果は？」

アリア「全然だめ。ダメキンジのままよ・・・はい、イメージトレーニング終了！」

ヒュっ！

キンジ「ぐはっ！？」

神崎はキンジの頭に刀が振り下ろされる

峰で打たれたものの、金属で殴られているんだから当然痛い

キンジ「っ～・・・」

キンジは頭を押さえてうずくまってしまった

アリア「まったく、少しは反応できるようになりなさいよ」

神崎にしては結構手抜きをしているほうなんだろうが、通常状態のキンジには少々キツいかもな

アリア「まぁいいわ。次は春都の番」

春都「へ？」

いやちょっと待った、なんで俺も！？

アリア「アンタもパートナーなんだからこれくらいできるようになりなさい。ほら！」

びゅんっ！！

春都「っと！？」

アリア「避けるな！」

春都「いきなりやられれば普通避けるだろ」

アリア「うるさいうるさいうるさい！」

春都「中の人繋がりですねわかりｍ」

シュッ！シュッ！！シュンッ！！！

アリア「意味分かんないけど、これ以上言わしちゃいけないってアタシの直感が言ってるわ！！」

先ほどとは変わり速度、鋭さが跳ね上がる。

コイツ本気できやがった！！

アリア「ここで始末してやる」

春都「ひ、ひぃぃいいい・・・あ、ちなみにユウジ、リュウジ、キンジってなんか似てるよね☆」

アリア「死ねッ！！」

春都「よっと。あはは～♪」

アリア「待て～っ！！」

ちなみに、このリアル鬼ごっこは一時限目が始まるまでに決着がつかずアリアの怒りは全てキンジに向けられたとか。

手乗りタイガー　灼眼　緋弾（後書き）

感想、意見要望、質問でもいいので待ってます！！

前略、ダストの中より

～放課後～

キンジ「あ～クソ、まだ痛てぇ・・・」

キンジは頭にできたタンコブをさすりながらとぼとぼ歩く

春都「大丈夫かぁ～？」

キンジ「お前が意味不明なこと言わなきゃもっと軽くで済んだんだよ」

春都「あはは～」

二人で話をしながら探偵の校舎を出た

アリア「キーンジ」

すると神崎がこちらに駆けてくる。

探偵棟の前で待っていたのか？

春都「つーか、なんで俺の名前は呼んでくれないの」

アリア「うっさい。今度変なこと言ったら絶対風穴あけてやるんだから」

そう言うと顔をぷいっと背けてしまう
朝、俺を捕まえられなかったのを根に持っているのかもしれないな

キンジ「なんだ。言っておくが、放課後は特訓なんかやらんぞ」

アリア「まだなにも言ってないじゃない」

キンジ「強襲科にも戻らないからな。無理やりにでもっていうのならパートナーは解消だ、俺は来年転校するまで探偵科で平和に暮らす」

アリア「まだなにも言ってなーい」

・・・キンジと話している時は機嫌がいいな。
キンジがパートナーっぽい態度をとってくれるからかな?・・・まぁ、きっとそれだけじゃないんだろうが。

なんだ、神崎もあんな顔もできるのか。
こうやって笑う神崎を見ると、アイツも可愛い女の子だよな・・・

アリア「また明日も特訓だからね、わかった?」

キンジ「わかってるよ・・・」

俺はその光景を微笑みながら見つめていた

『また明日ね、ハルくん』

春都「・・・・」

また・・・明日か。
そうか、アイツらにはあるんだよな
俺が・・・・・・・・・

「・・・る・・・？はる・・っ！ねぇ春都聞いてんのっ！？」

キンジ「・・・あぁ、悪りぃ。なんだ神崎」

アリア「もう！アンタも明日、一応来なさい」

春都「あ～、はいはい」

アリア「？・・・なんか妙に素直ね」

春都「俺はいつも素直だろ？」

アリア「・・・まぁいいわ。今日みたいに遅刻してきたら風穴だからね」

そう言うと神崎はくるっと回って前を向いて歩いて行った

くだらねーこと考えるのはやめるか。
・・・悔やんだところで変わる事はないんだから・・・

アリア「ねぇ、あれ見て」

神崎が教務科の前で足を止め、掲示板を指差した

『生徒呼び出　2年B組　超能力捜査研究科　星伽白雪』

白雪が呼び出しとは珍しいこともあるな。

キンジ「お前この間、白雪に襲われたのチクったのか?」

キンジは神崎を見ながら言う。
すると神崎はギロっと睨みをきかせながら

アリア「アタシは貴族よ。プライベートな事を告げ口するような、卑怯なマネはしないわ。いくら売られたケンカでもね!」

キンジ「そうかぃ、それはすまなかった。じゃあ帰んぞ」

アリア「待ちなさい。これはあの凶暴女を遠ざけるチャンスだわ・・
・この件を調査してアイツの弱みを握るわよ!!」

おいおい、先ほど言った事とやろうとしている事がおかしくないか？神崎さん・・・

キンジ「弱みって・・・なんで。白雪はあれから来てないだろ」

アリア「来てるじゃない！最近、アタシが一人だとあちらこちらでドアの前に気配がしたり、物陰から見張られてるカンジがしたり、電話が盗聴されてるみたいに断線したり（ｒｙ」

春都「あははｈ」

アリア「笑い事じゃないわよ！！こないだなんか更衣室のロッカー開けたらピアノ線仕掛けて（ｒｙ」

いちいち長いから省略

アリア「とにかく教務科に潜入するわよ！」

――――――――

春都「はい。ということで私達は今、ダクト中を匍匐（ほふく）前進で進んでいます。」

アリア「何ブツブツ言ってんのよ」

春都「実況だよ。いきなり場面を変えるとわからなくなっちゃうだ

ろ？」

アリア「はぁ？また意味のわからない事を・・・」

キンジ「ケンカしてないでさっさと進め」

ちなみ今の並び順は

↑進む方向

神崎　キンジ　俺

となっている。

それにしてもまさか教務科（マスターズ）に潜入する事になるとは・・・

武偵高には『三大危険地域』と言われている場所がある。

強襲科、地下倉庫・・・そして教務科だ

武偵高の先生はヤバい奴らが大半だから、そんなのが一か所につまる場所だ。恐れられてもおかしくはない

アリア「次は右よ」　シャカシャカシャカ

キンジ「・・・お前、匍匐前進速いな」　ゴソゴソ

アリア「得意なの。強襲科の女の子で一番速いわ」

キンジ「だろうと思ったよ」

アリア「なんで」

キンジ「邪魔になるものがないからな」

アリア「なにが？」

キンジ「胸だごぶｖｒｊｂｋも７ｔっ！！」

前にいるキンジが意味不明な奇声を発する。いったいなにが・・・
だがキンジは少し勘違いしてるんじゃないか？
神崎の胸には夢が詰まっている素敵な・・・
素敵な　ちっぱい　なんだよっ！！

――――――――――

春都「皆さん見えますでしょうか？私達はついに星伽白雪さんを発見することができました。これは歴史的な快挙ｄ・・・」

アリア「うるさい、バレたらどうすんのよ」

春都「すみません・・・」

神崎とキンジは通気口から白雪と誰かの話を聞いているのだが、俺は定員オーバーのため一人聞けないでいる。
どうやら白雪は誰かと話をしているらしいのだが・・・
ダメだ。全然聞こえんし、見えるのはキンジと神崎の足
あ、今なら神崎のパンツを・・・

くんくん・・・
それにしてもさっきから何の臭いだこれ？煙草とは明らかに違う

これは・・・

おい待て、まさか・・・ここにいるのか?あの人が

ガクガク・・・

あ、やべ悪寒が・・・

キンジ達に言ってここから早く逃げよう。うん、それがいい

春都「き、キンジ俺ちょっｔ・・・」

がしゃんっ!!

そう言う前に神崎が通気口のカバーをぶち破り下へ降りて行った

ちなみにキンジは滑り落ちるように落下・・・

春都「ちょっ・・・」

えぇ～・・・

どうすんのこれ。

なんか話してるけど、これ以上近づくとバレるかもしれないし・・・

よし、逃げよう。
キンジ達がチャンスをくれたんだ、これを生かさない手は無い
ゆっくりと後ろに・・・

「まだ上にいるヤツ～、早く出てこないと・・・撃つよぉ？」

・・・・・・。

前略、ダストの中より（後書き）

受験の次は免許だよ・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0655w/

緋弾のアリｒｙ　～春に恋するお年頃～

2011年12月24日03時48分発行